インタールード
5 章 技法——道徳論
中東への旅を行なう者が、文明世界を、苦を持つ家庭教師の世界、因習と駄致の世界、牢獄生活の場、囲まれた土地と言明し、そこから脱出する者と自らを見失っていたことはすでに述べた。文明の観から解き放たれて、旅人はオリエンタルへと向うと語っていた。その時、牢獄からの解放の比喩をバートンは使う。

広々とした平地へ出ると、私は快よい感動をおぼえた——（それは）捕虜がその牢獄から解放されて経験できるような喜び（であった）。太陽の光は、私を新にされた命と気力をとあたためあげ、砂漠の空気は芳香であつたし、自然の素朴な顔は、なつかしい古い友人のほほえみのようであった。

文明はヨーロッパの都市を監禁都市とすると言われ、ワーズワースは、円錐する壁の中に人々を幽閉する牢獄の都市、拘束の家をうたいあげ、コールリッジは、都市の悪と苦難とにとじこめられた友を思う。それに対して、人は自然の霧の香に香風に救われた、とあたわれる。牢獄都市より解き放たれて、五感はあらわれ、自由を得て魂はいきかえる。こうした、自由と解放のコンテクストが、旅行者の脱出の言説を明らかにする。

しかし、自由へと脱出して来た旅人を待ち受けていたものが、中東の隠蔽の世界であり、疫病による阻害と拘束、自然と気象の攻撃、そして、暴力と敵対の世界であったことをこれまでみて来た。様々の場面での旅の困難さ、危険は、福音、正義、知と対比されて説明され、意義づけられ、克服・回避されることとなり、沈着で冷静で決然とした。調査者で冒険者で識別者である旅人の姿が浮かびあがる、という言表の構図も明らかなものとなった。こうした旅人自身が語る姿こそ、グレートン・ツァーが目的としたジェントルマンという姿であることは、容易に理解されよう。偏見のない判断力を持ち、事態を的確に識別し、自らの外見をととのえることが、グレートン・ツァーでもとめられた、ジェントルマンのとるべき姿であったのだから。

19世紀のイギリスは、中世趣味と騎士道精神の復活、建築におけるゴシック様式の復活、キリスト者の「男らしさ」が行動規範されたことで知られている。キリスト教社会として中世が理想化され、信仰の証として中世的なものが称称され、それらが、ジェントルマンたることと合体し、騎士道精神とスポーツマンシップの形をとって、人々の行動規範が形成されていったことが知られている。その理念は、ウォルター・スコット、ケネルム・ディグビー、トマス・カーライル、トマス・アーノルド、チャールズ・キングズリー、トマス・ヒューズといった、著名な小説家、歴史家、教育者達が明らかにしている。キリスト者として肉体的にも道徳的にも成熟した、騎士たる近代のジェントルマンは、「神への信仰と信頼、寛大、高潔な名誉、独立心、誠実、友人や指導者への忠誠、大胆さ、奢侈の軽蔑、礼節、謙謙、慈悲、女性尊重」を美徳とする者とさ
かれ、その精神は、「人を英雄的かつ帯大な行動へと駆り立て、知的で道徳的な社会において崇高かつ美しいすべてのものに親しむ」ものとされ、「偏見のない、心の広い、上品で、騎士的で自由な精神の持ち主」が「男らしい」とされ、 「自己主張と果断」が必要な特性とみられる。「独立独行の道徳的成熟」が、こうした美徳に「高い社会的地位の高貴さと魅力の性にはほどを保たせる」に与えた、と明らかにされている。「活動の現場で奉仕するキリスト者」は、こうして「男らしさ」を証し、ハンティングや拳闘や乗馬で肉体を強化し、「節制、克己、冷静な判断」が求められ、「道徳の益の源であり、道徳の勇気の刺激である」正しい種類の友情を得て、「無知、疾病、自然の様な力に対する闘い」を行うものと説明されている。

当然、旅行者の表出する本心の姿も、こうした騎士＝ジェントルマンの言説と重ねられる。勇敢さを証し、冷静さを示し、無知や迷信を指摘し、知的なであって正しさを誤ったものと識別し、崇拝を味って、オリエンタルの多彩な隠蔽の姿を明らかにするのが旅人の姿であったと言葉されているのだから。

こうした姿が、旅の日常の中でどのように表出されていたか、これからみてゆくことしよう。日々の行為の中で、旅を可能なものとしつづけなければならぬ旅人は、日々の自分の姿をいかに表出していったかどうか。そして、自分の日々の立場を明らかにした時、旅人の前に現われる人物はいかなる姿をとり、また風景はいかなるものであったのだろうか。

1. 馬とラクダ

古くから、中東は、馬とラクダで有名であった。ヘロドトスは、「アラビア人部隊（は）……全員、足の速さでは馬に劣らぬ駱駝を駆っていた」と述べ、ディオドロス・シクルスは、アラビアにおける「馬の背の上の狩人達」の存在を語っている。ウクライナやトルキスタンで家畜化された馬は、スキタイ、ヒッタイト、アッシリア、ペルシア、パルティア等の馬文化を成り立たせたもの。こうした家馬の中で、東洋馬（Equus orientalis）、つまり、アラブ馬は、よくヨーロッパの注目の的であった。その速力、優雅で端正な形態にすぐれたアラブ馬は、第一次世界大戦の頃まで、良の軍馬として各国がもとめたものであったという。この馬とイギリスの在来種との交配の結果生まれたものが、サラブレッドであるのだろうとある。

サラブレッドの三大種牡馬は、ゴドルフィン・パルプ系のマッシュム、バイヤリー・ターキー系のヘロド、ダー・アラビアン系のエクリップスで、すべてのサラブレッドは、この三頭の雌馬のどれかにたどりつく、と言われている。バイヤリー・ターキー（トルコ馬）は、1683年のトルコ軍によるウィーン包囲の際、トルコ軍より分捕りされてイギリスに渡ったものと言われ、バイヤリー大尉の乗馬であったとされている。加茂儀一は、この馬は多分モーコ馬であったであろう。
うとしている。ゴドルフィン・バルブ（バルブ馬）は、モロッコ王がフランス王に贈ったもので、イギリス人が入手（1730年）、ゴドルフィン伯の所有となったものとされている。バルブ馬は、西洋種のスペイン馬が北アフリカにたらされ東洋馬と混血してできたものとも、エジプトからもたらされたアラブ馬とも言われている。そして、ダーレー・アラビアンはシリアの領事ダーレーがアレッポで購入し、ヨークの兄に贈ったものと言われ、現在のサラブレッドの90%は、この馬の血をひいているとされている。旅行者のプラントは、ゴドルフィン・バルブ（アラビアンとしている）とダーレー・アラビアンの血統を【表7】のように示している。【表7】では、プラントの表にある、他のすべてのアラブ馬の血統を省略した。混合種であるが、「外観では、頭がしゃしんで、鼻が短く、四肢も細く、まったく東洋種の特徴を多くもっている」と完成度の高い芸術品の如き固定品種のサラブレッドにとって、中東はその母国とみられよう。精神の母
なる中東を旅する者達の。中東のアラブ馬についての言説が注目される。
中東から持ち出され、完成された馬に対し、ラクダは砂漠の地から出ることはない。たとえば、加茂儀一は次のように述べている。

...駱駝はどこまでも砂漠や草原に適応した体を備えている唯一の動物であって、昔から「砂漠の船」とよばれる所以もここにある。……
この典型的な砂漠動物は、したがって半砂漠や砂漠以外の場所では何の役にも立たない運命をもっている。……顕著にその形態と祖先伝来の環境を固執しているこの動物は、……
変化に対する順応性の乏しいことと性質の遅鈍と強情のために、……特定の場所から一步も出ることができないのである。26)

19世紀の疫病（ペスト）の影響、中東にとりまわりつつあるラクダが旅行者によって説明される。とは言いすぎか。砂漠の旅では欠くべからざるものだが、旅人の西欧での経験の範囲にはなく、旅人を中東で待ちうけている点で、ラクダに関する旅行者達の言表が注目される。

i 騎乗

旅行者自身の騎馬についての記述は、中東人による騎馬（あるいは馬のとりあつかい全般）についての記述と対比的であるとともに、ラクダ騎乗についての記述とも対比的である。それらは、旅行者の中東での開発の表現と深く結びつく。

ブラント夫人は、その手に入れた雌馬を次のように述べている。

（この馬は）我々に、イギリスのサラブレッドとアラブ馬との間に存在する関係を理解させる。彼女は、とりわけハンサムというわけではなく穏やかな鼻（つまり、付根がへこんで貧弱な鼻）をし、奇妙な、野生的な頭をしていた。しかし、彼女の額まわりの深さと長い筋肉質の臀部は、彼女が実際を持っていたすばらしい特性、スピードと耐久力を要求していた。容貌や血統はどうであろうと、アラブ馬を購入する時、道中での疲労に耐える力と、食糧不足に耐える力が、常に考慮される特性である。しかし、スピードは例外的で、最良の血統に限られる。我々がハザルと名づけた（この馬）は、ケヒラン・アジュス（Kehilan Ajúz、前出の血統表参照）の血統のもので、そのすべての中で最も速く、最も頑強で、最もイギリス馬に似た容貌をしていた。……彼女は温和でおとなしい気性で、いらしたらり、あわてたりすることなく、イギリスの競走馬の長く低いストライドで、常になめらか
に進んだ。彼女は、アラブ馬の中では並はずれた体高で、15ハンドあった271。

ペドウィンも称賛し敬意を表した283、良い血統の、スピードと耐久力にすぐれた、この好ましい馬はサラブレッドに類似し、その血統からダーレー・アラビアンを生んだ血筋の馬である、とブラントは識別する。

「従順なアラブ馬、最も有用で、根気の良い、唯一苦情を言わぬ」290良馬は、旅を快適なものとする。馬を好む人々は、その快適さをより深めることができる。

アラビアの最良の血統の馬を与えられた……300。

アラブ馬の背に乗り、私は現在の健康状態では可能と信じられなかった、気分の軽さと精神の快活さを感じていた。……もし何か私の東方での旅に関わるもので、私を無我夢中におさえ得たものがあるとすれば、それはあの馬の思い出であろう。その背に乗ると、私は高い所に持ちあげられ、ペドウィンにふさわしい喜びをもって、砂漠の清浄な空気をかいいでいると感じられた311。

私がすっくと馬の鞍に身を置くと、私の高貴なアラブ馬は、朝の新鮮な空気が着手した（私を生きかえらせる）ことを、いつも完成させた。実際その時、私は、すばらしく晴れた天候と、すばらしい良馬のこの二つのものにどれほど感謝しても、感謝しすぎることはない、と感じていた。そして、私は、ほぼこの二つのものだけが、あの旅で私を支えてくれたのだっただと考える321。

このように、病気故に旅をはじめたスティーヴンズは、中東の天候と良馬で生きかえると言明する。脱出の旅が、いくらかその目的を達したように思われる。

しかし、この快適な乗馬を楽しむためには、ヨーロッパの鞍や鎧や査定が必要であることが強調されている。

幸福にも我々は自分達の鞍を持って来ていた。トルコ鞍はすぐと我々を無力にした。私は、特に、シリアへ赴くどんな旅人にも、この最も必要な道具を支度に入れて持って来ることをすすめる331。

（我々）は、イギリス鞍を持っていった……。イギリスにあって、東方への旅を考えていた
時，私はみごとに（予期して）当てた……私は、普通の拍車を持って来た。これらは、
私には馬での旅を通して乗らなければならない、多くの不幸な馬の上で機嫌良くしつづけ
させてくれて、大きな満足であった。

というのは、中東の馬具、駆乗の仕方、そして、馬のとりあつかい方が、ヨーロッパのそれと異
なっているからである。そのことを旅行者は次のように解説している。

…（アラビアでは、馬は）馬術や馬術なしで乗られるのが普通で、乗り手の膝や膝（によ
る合図）と繊細のちょっとしたおさえとかけ声に感じ、それに従うので、（その繊細さ
は）、木馬や大馬術やその他のすべての（馬具）がつけられるとかと言え、最も入念な調教
がヨーロッパ馬にもとれるかなるをもとめている。私は、しばしば、馬の持ち主の
招待をうけ、彼らに乗り、鞍も手繋ぐこともなく、全き駆け進ませたり、向きを変えさせ
たり、疾走中に急に停止させたりが、そうしたことは、馬の動作と私の意思との間の一一致に、
ごくわずかの困難も不自由もなく（行なわれた）。その背にある乗り手は、事実、自分自身
を（馬とは）別の存在ではなく、ケンタウロスの半人のように感じる。このことは、従順さと全き御しやすさを与えることではヨーロッパの（調教）より好ましい、アラブの馬の
方式によっている。

ヨーロッパとアラビアの馬のとりあつかい方の差異が、ここでは、調教と人馬一体の観の差異と
して表現されている。馬具と調教によって仕込まれたヨーロッパ馬は、「こまやかな感覚を持つ」
人間と一体化したアラブ馬と対比されることとなる。

アラブ馬は、既に監禁され、目ぐくされ、馬具をつけられ、呪われた独房の囚人である
「楽しいイングランド」の馬よりも、ずっと温和で、一般的により利口であることを私は
喜んで認めめる。……人間と密な接触の中で育てられ、比較的自由に感覚や四肢を使える
ことで、アラブの四つ足の駄は、良い血統がもたらすどのような感情や本能をも全く有利
に発達させるみこみがある。

砂漠の地の自由が牢獄の文明と対比されて脱出者たる旅行者によって指摘されたように、自由な
とりあつかいをうける、命をよみがえらせるような力を与えるアラブの馬は、ヨーロッパの監禁
の馬と対比されて理解され、描き出されている。
もっとも、都会の住人は、繊細だけを使うベドウィンとは異なって、馬具を使用していること
が指摘されている。アネイザでは、「都市住民」は、鍬のない鞭数きを使い、するどい馬術を使うと述べられ、さらには、

オリエントの鍬の角は、非常に劣った素車の代用品である。オスマンの乗り手は、跨った馬の低い背の上に、鞍によって大変高々と身を置き、その馬のたて髪を立たせ、旅のオーソドックスな歩みである、奇妙に速い小刻みな歩みを強いることができる。

と述べられている。こうして、鞭や鍬や馬術を使うにせよ、使わぬにせよ、ヨーロッパ人の乗馬と中東人の乗馬は異なっていることが明らかにされる。中東の都市生活者の馬具はヨーロッパの旅人を快い乗馬にささえものではなく、それよりは、旅行者、ベドウィンの馬のあつかいのそれを好くもしく思っているようである。人と馬がベドウィンの間では一体化している点で、アラブ馬の長所を読みとっていたのだから。

ベドウィンは、決してその馬をたたかず、最上のごさしさで扱っている。そのテントの間を歩いてゆくと、馬達は（そこで）食い、子供達は若い仔馬と遊び、女達はその家族の離馬の背を軽くたたき、愛撫している（のがみうけられる）。……これらベドウィンは、この馬に対して、自分達どうしのように親切でやさしい。

このように、サラブレッド等のヨーロッパの馬との類似と差異が明らかにされたアラブ馬の描写に対して、ラクダの描写は、その特異な経験として示されている。

ボーターは、「私は、しばしば、ドロメダリー（騎乗のラクダ）に最初に乗ることは、人の一生涯の重要な時を形づくるということを耳にしてきた」と語って、ラクダに乗るという経験が重々しいことであることを明らかにしている。何故なら、その最初の駒乗の機会こそ、落ちしがちな機会であるからで、多くの旅行者が落ちの経験を語ることになる。

（アブラミラ行で）私は巨大な動物に乗らねばならなくなり、片足をその背に置くや否や、この橇の強さ動物は、アラブ人達が抑えようと努力したにもかかわらず、跳びあがり、私を完全に宙返らせた（アラブ人達）は、（このラクダ）をなだめて、再びひざまずかせようとし、ラクダは、明らかにその背に非常に奇妙な服をつけた人間を負うのを大変嫌い、恐ろしく不平（を示す）声をあげ、不満を明らかに示しつつも、説得されて遂に（指示に従った）。

5 章 技法——道徳論

249
紅海岸をモーセのあとを追うスティーヴンズは、その時の光景を次のように表現している。

私は、不注意に騎乗しつつ紅海の方へ後ろにふり返り、シュロの林に達した時、多くのカラスの群が飛び立ち、私のドロメダリーは突然の羽音におどろいて跳びのき、私をその長い顎をこして全く頭のむこうへと20フィートも投げとばし、砂の上に大の字にのばした。イスラエルの民がその彷徨をはじめた所で、私の放浪が終ることがなかったのは神の慈悲であった。しかし、私は頭をまるため両手を手頸までふかふかした土の中につっこんだため、この後二ヶ月以上傷跡が残った。私は倒れれた場所に腰をおろしていた……。私は決して（その時の）落日光景を忘れることはなかろう……。私は、神の選ばれた民が海の乾いた底を歩いた後、分けられた水がもとに戻って行き、追跡者の大軍を飲み込んでゆっくりの立ちどまって跳めた所に、腰をおろしていた。反対側の山々は、大いなる奇跡に立ちあったことを誇り、自覚するのを知る、暗く不吉に見え、太陽はその山々の背後にゆっくり沈んで行き、姿を消してかなりたとき返照の輝きを残して、その輝きは、ほとんど超自然の光でもって暗い水面を照していた。

騎乗・落下の重大さは、聖書の重大事件と重ねあわされ、神への信仰を新たにすると理解されよう。中東の危険はラクダとエジプト軍に重ねあわされ、すべては神により救出される、という言説が現われたとみられよう。重傷とならずとも、ラクダからの落下は危険なものので、突然の方向転換におどろき、乗馬しているつもりで、端網をひいてしまったキングレイクは転落し、頭をしたたかに地面に打ちつけ、厚めの帽子によって命が救われたと語っている。

石の上に投げられた者は不幸なことだ。私は、残酷にもこうして不具になったベドウィンを知っている。それは、私の旅の仲間である、ラクダの悪癖であった。……我々の間のぼかせ羊のように、多くの狂暴なラクダが砂漠に居る。

砂漠の馬は旅人を蘇らせ、ラクダは狂暴に人を死傷させる、との対比的な言辞が指摘されるよう。こうした表現を与えられたラクダの背に、それでも乗っているためには、御者の力を頼み、また、ラクダの歩態に慣れる必要があるとされ、「（ラクダ）なしで、そうした旅をどうやって遂行し得ようか」と強調される。

もちろん、多くの旅行者は、ひとりではラクダの背に乗ることはできない。御者がラクダをひざまずかせてはじめて、旅行者は騎乗することができる。そこで、旅人は、ラクダを御す方法を記述する。
…烈しく打ちつけるか、露骨に騒がずつとすることでしか、命令するにせよ、強いるにせよ、ラクダに影響を与えられない。\(^{47}\)

アラブ人が、そのラクダを御す（ために発する）音声は、非常にわずかで、非常にかすれたノド声である。ひざまずかせる合図は、静かないびき声に似ている。（それは）鼻を通すというのではなく、口差に強く息を打ちつけるようにして出す。止める合図は喉音による鳴き声のようなもので、私には会得できぬものであった。\(^{48}\)

御し難いラクダは、あごで首をつかむことでひざまずかせられる。もし横になったラクダが抵抗して転がり、鳴きわめくながら、鼻の軟骨をつかむとおとなしくなる。\(^{49}\)

ラクダは、馬の場合とは異なって、野卑で、露骨で、まねのできない統御法で御されている。旅行者は出発していて、こうした統御法のもとに自分が置かれていることを明らかにしているとみられよう。

こうしてラクダの背にゆられる旅行者は、ラクダの特異な歩態を経験することになる。「不愉快な」、あるいは、「不格好な重苦しい歩み」と表現された、その側対歩の歩みは、次のように気付かされている。

象と同様、ラクダは、大洪水以前に生きていた古代の…方法でもっていまだに歩いているが、現代のラクダの歩行方式は、古風な動物の一つである。ラクダは、左側の両方の足を同時に進めて動き、その次に右側の両足を不格好にゆすって、そちら側の運動をくり返すようにする。従って、その步態は、最初は非常に不愉快であるが、すぐに自らで順応できるようになる。不慣れでもばらばらの支離滅絶な種類の動きである。\(^{50}\)

今はほとんど消滅した、と注釈された古代生物の歩態という表現が、進化論を予想させるものであるかどうかは不明であるが、にせたされた古代の風習という表現と重ねあわせで理解されるものであることは、その用語から明らかである。古代のオリエントの遺風は、ここではラクダの姿として、不格好で支離滅絶さを強調するということであろう。もちろん、馬の姿の優雅さと対比された表現であることも明らかである。

さらに、この歩態を、エドワーズは次のように表出している。

その歩態は、その（余分にある）関節よりも複雑で、その気性よりも腹立たしい。ラクダ
は四つの（歩態を）有する。――逆波の立った海での小さな舟の横ぬれのような歩幅の狭い常歩、あなたの体のすべての骨をばらばらにする歩幅の広い常歩、あなたを弱らせず歩く、そして、突然死（を与える）襲歩（である）。16時間ものラクダの背での重荷でも十分な罪は起こらないような罰を考えようするとはむだなことである。それは、どのような人間であっても（その人を）責める方法として、欣然としてとられるこのるべき処罰である……。55）

ここに至って、ラクダの歩態は、さけることのできない不適な重い刑罰と表現されている。この歩態の表現の中に、旅人のまぎ込み、あるいは、拘束する中東の暴虐の姿がラクダの姿に重ねられているとみられよう。

ii 特 性

アラブ馬の純血種の所在、その繁殖地が旅行者の注意を集めている。それは、「我々のイギリス馬が生まれたものと息災地」54）ということになる、と理解されるためである。

ネジドに、アラブ馬、そのもとその種、真正のモデルの真の出生地がある。……ともかく、ネジドのすべての繁殖地の馬の中で、（サウード家の）ファイサルのものが、明らかに最高であった。そこで、それを見た者は、アラビアで、多分世界で、完成した馬の最も完全な標本を見たことになる55）。

この旨及びに対して、プラントは次のように批判的に述べている。

牧草のない土地であるリアド付近では馬は繁殖されず、ネジドの他の場所の馬は、アナゼ族の馬よりも小さく良くないと言う。……（また）イブン・ラシードはそのすべての雄馬をベドウィンから、多くをアナゼ族から入手し、イブン・サウードは、イブン・ラシードから得ていると言う。……アラビアで最良の馬はアナゼ族の馬——とくに、セバー族やフェグーン族のものである56）。

ゴムサ族（セバー族の支族）は、砂漠で偉大な馬の飼育者である。……彼らの馬以外のすべての馬は、語る価値のない種種である（としている）57）。

---

52）

53）

54）

55）

56）

57）
繁殖し、飼育するのはベドウィンであり、その遊牧する土地で、アラブ馬の血統が保持されていることが確認される。こうした馬が、例えば、アイルの馬市にもたらされ販売される。当歳馬がセパー族から購入され、町で三歳まで飼い馴れ、この馬市でアレッポの商人に売られる。この馬市は「アジアで、純血種の馬の選良の市」58である、と述べられている。しかし、1頭の馬は数頭のドロメダリーより費用がかかり、裕福な者のみが立派な血統の馬を持つと言われ、『馬を持つことは栄誉のしるしを受けること』59であるという。そこで、次のような記述に出会うことになる。

錦鉢のネジド馬……（は）、首長やかなりの富や地位を持つ者だけが所有する。彼らは売却されない、あるいは、少なくともすべての人々はそう言明する。私が、それではどうして手に入れなのかとたずねると、「戦争や遺産や随意の贈与による」との答であった60。

馬の血統は大切にされ、保護されているというが、こうした旅行記の表現において強調されているとみられよう。

ラクダについては、馬との類比の言葉によって、描写がなされている。まず、ピュフォンが、キャラメルはフタコブで、ドロメデーリーはヒトコブであるとしたところ、反論がなされ、アラブのラクダはヒトコブで、「東方に来て以来、フタコブラクダに出会うということは非常に稀で」61フタコブラクダは「ペルシアの血統に属し、アラブ人がパクテイ、つまり、パクトリアンと呼ぶもの」62であることが明らかにされる。そこで、ヒトコブラクダの、ドロメデーリーとキャラメルの差異が言及される。

アラビアでは、キャラメルとドロメデーリーは、全く同一の属の生きもので、ドロメデーリーは純血種のキャラメルであり、キャラメルは育ちの良良いドロメデーリーである、という違いだけ、それは、競争馬と普通の乗馬用の馬との間の差異と同じものである。つまり、どちらも馬であるが、一方は血統を有し、他方はそうではない（いう差異と同じである）。ドロメデーリーは、（ラクダの）種の競争馬で、やせて、優雅で——あるいはは比較的優雅で——、美しい毛を有し、軽い歩調で、楽な歩調であり、（他方の）軟毛におおわれ、ずんぐりした体型で、重い歩調で、不恰好で、（体の）動揺の激しいキャラメルよりも、ずっと渴望に耐えるものである63。

エジプトとシリアのドロメデーリーは……キャラメルと同じ種に属し、そのより不恰好な仲間の奴隷に対して、競争馬が競馬に対するのと同じ関係を有する。この生きものの速力と忍
耐力は特別である。64

ドロメダリーの表現にサラブレッドのそれを使用され、キャメルとの差異が明らかにされていることがわかる。と著え、ラクダの場合良い血統なるものが認められることはない。類似という形での表現以上のものが、ドロメダリーとサラブレッドの間に考えられることはない、ということであろう。

その他にも、例えば次のような差異の指摘がある。

…博物誌の基礎に立ってはいないものの、力強く、のように、一般的にジェメルと呼ばれる、荷運びに使われるキャメルと、血気盛んで、より御し易い、よくしつけられた騎乗用のラクダ、ヘッジパック（ハッジ）がその良い騎乗用の動物に大いな価値を与えたためヘッジパックと呼ばれるものとの間に、一般的に大きな差異が存在している。……古代人の間で、ドロメダリウス、あるいは、カメールス・ドロマスなど、その名が示すように、騎乗に適した、ほっそりとした品種の駒馬以上のものを意味したように思えない。65

ところで、こうした馬とラクダの類似と差異の識別の上で、重要なものとされた血統はどのように認知されていたのだろうか。

（馬）の血統表は、ときに、その首のまわりにつけられている（と言うが）、この点については、私は疑わしいことだと思っている。純血種が見つける即の場所である砂漠のとり辺りの場所では、文字は知られていない。口頭で伝えられた血統表は、内部の力を示す有効な（馬の）外見の構造で選ばれる。高貴な血統を表わす象形文字によって、十分に確認される——これは最も信頼すべき血統表である。66

こうした、馬の高貴な血統を明示する、有効な姿、象形文字は、次のように詳しく記述される。

非常にまるまるとした臀部、この上なくエレガントな傾斜をもった肩、……小さな、非常に小さな転部のくぼみは欠点のない軽快さを示す。上部の広い頭部は、次第に細くなって美しい鼻に至る。最も知的で、しかも、非常に優雅な顔だち、ほっそりとした目、するどいいバラののような小さな耳、打ちのばされた鉄でできたような、美しく、腕が十分にあわされた前・後肢。堅い地面に対して必須の、ととのった丸い蹄。完全なアーチ状についた、というよりは、突き出した尾。すべてを、光沢のある明るい毛。たてがみは長
いが、のびすぎることも、重いこともある。……彼らの外見は、すべての評判、すべての価値、すべての詩が正しいことを確認する。一般に毛色は、栗毛か黒毛で、明るい鹿毛、鈑色、白、あるいは黒色は稀であった。……もし何かネジド馬の特別な特質を示す点か、と問われれば、すべての部分が完全で調和がとれている、肩の傾斜、髭のすばらしい美しさ、そして、完全に丸い臀部である、と答えるべきであろう……（67）。

この詳細な馬体の美の記述につけて加えるとすれば、次の描写であろう。

頭は美しい。広い前額、光り輝く、つき出た耳、優美な形をした耳は、どの動物でも高貴さの証拠となる。高い枝甲、十分そだった肩、はいけるような筋肉をつけた、美しくすっきりとした四肢、そして、下のすべての血管のみえる緑のような皮膚は、飲むことのできぬ、美しい血統の証拠を示している（68）。

血統の高貴さは、その美しい姿によって示されているという説は、すでに述べた、レバノン山中の貴人の外見の強調に重ねあわせられる。つまり、

（アラブ馬）は、高貴な動物で、その力と忍耐力とともに、その騎士的な気性で注目される。勇ましいが従順、憧れはないが優雅、血脈盛んだがラクダのように忍耐強い（69）。

というのだが、アラブ馬を象徴する言葉ということになる。旅人の理想の姿の観念が、アラブ馬の姿に重なる、ということであろう。

理想の馬の姿に対して、ラクダは不恰好で、狂暴で、愚鈍であると表現される。

（ラクダ）は馬の高貴さと高貴な気質を欠いている……（70）。

その欠点を、バルグレイヴは、匹敵する手をしのび高く、次のように説明している。

イギリスで、私は、一度ならず、「従順なラクダ」について耳にし、読みをしてきた。もし、「従順な」ということが、愚鈍な、折り合いが良い、そして、おとしないとことを意味するのなら、ラクダは従順さの正にモデルである。しかし、この形容辞で、できる限り乗り手に関心を持つ動物、何らかの方法で乗り手の意図を理解する、または、従属する仕方で意図を同じくする動物、そして、馬や象のように、ある種の素直さから、または、
主人に半ば同感することで従う動物を表示しようとするとならば、ラクダは決して従順ではなく、大いにその逆である。……
つまり、（ラクダ）は最初から最後まで、飼育されることのない野蛮な動物で、主人の側の熟練や極端な無従を除けば動物自身の協力なしに、営みの愚隷さによってのみ役に立つようにされ得る。愛情や習慣は、安全を左右することはない。全く野生的である、ということには油断のないものではないが、決して飼い慣らされる。

ラクダの持つ唯一の情熱は、復讐であって、その平素の性格であるすべての苦情や愚隷さを絶えず、予期せぬほどに考えぬかれた恶意を示す。多くの恐ろしい例が与えられている。

愚隷さ、こうした描写では、野蛮と悪意を結びつけられ、中東の人々にみられる復讐が、ラクダを通してその姿を現わすことになる。暴虐の世界の中の暴虐の動物という言説を、旅行者のラクダ表現にみることができる。従って、ラクダには「悪」の言葉が与えられることになる。

（ラクダ）は強情で、しばしば、邪悪である。

住民である砂漠地域にみごとに適応しているラクダは、しかし、砂漠での旅がもたらす「悪」の一つを構成する。

こうして神の怒りや、荒廃の、不毛の野に生きる野蛮な人々と動物についての旅人の表現に「悪」の言葉がくり返されることとなる。ラシード家の暗殺と復讐の悲劇は、「悪」の喚われる本性と語られていたのだが、サウード家の恐怖の暗殺者は、手に「悪」を帯びつつ表現されていたのだが、圧制と反乱と鎮圧の暴虐は「悪」の暴動をくり返すものと説明され、かつてキリスト者の世界に脅威を与えた、オスマン・トルコの暴虐の力は「悪」と語られ、今その「悪」が疫病の形をとって中東を覆っている、と表されていたのだから。こうした暴虐の言説に、ラクダの描写が加えられることとなる。旅人にとって、それを回避するか、克服するか、あるいは、それに順応するしか方法がない。そのためには、その力を識別し、詳しく表現し、理解する必要があることは、他のすべての「悪」と同様と言われなければならない。

iii 役割と有用さ

高貴で、美しい、生殖のアラブ馬と、野蛮で、不恰好で、悪のラクダは、中東の生きものとし
5 章 技法——道徳論

て、この荒廃の地に適応し、耐久力のすばらしさを示すものとして、旅行者によって表出されて
いる。

ネジド馬は、特に、大変なスピードと疲労に耐える力で評価されている。……24時間（水
を）飲むことなく、だれすることなく、道を進むということは、確かに価値のあることで
ある。一気に48時間、続けつくようなアラビアの空の下を、変らぬ禁欲と労働をあわせて
継続することは、この馬種に特別なことだと私は信じる74。

あるいは、山岳地への適応は、次のように記述されている。

小さな山々にとりまかれた、暑い平地のひだりの続く荒野で育てられた砂漠馬は、はねる馬
ではないが、岩の多い土地を登るための非常にしっかりとした足を持っている。彼らはか
なりの重量を運ぶ。私は、遊牧民が、彼らの雄馬は「四人の男を運べ」を自慢するのを
耳にしていた75。

そして、その耐久力を旅人達は経験から、次のように表出する。

私の友人がサイロからスエズへ、85マイル（の道）を12時間で、馬を走らせ、1、2時間
の休息の後、12時間で（サイロに）戻った。この旅の間、馬は食物を与えられることなく、
馬飼を冷やすため水をひと口飲まされただけであった。私は（血統の）同じ馬に、あると
き24時間乗り、他のときに30時間乗ったが、30分ごとにぎりの大麦が食事として与えられ
た時を除いて、休憩も食物も（その馬には）与えなかった。そのどちらの場合も、馬はそ
の旅で、水を口にすることがなかった。海軍の私の友人数人、同じ（血統の）馬に乗り、
…約60マイルの距離のほとんどを襲歩で（疾駆し）、イギリスの馬では登るのが不可能のよ
うにみえる道を行くのを常としていた。……彼の言うには、真のネジド馬は、120マイル
を疾駆させても、ひと度息をはずませることはない76。

ラクダの中東世界への適応も、馬と同様に、主にその耐久力という点で誇られる。

…（ラクダ）は非常に大きいので、普通とらされる短時間の速度は、多分、1時間に10か12
マイルの進行を意味し、この歩態を（ラクダ）は、食事や水や休息なしに、三昼夜間断な
く歩つことができる77。
そして、砂漠への適応は、次のように表現される。

...創造主の恩恵で、（ラクダ）は砂漠の運搬者であるべく作られた。荒野の粗悪なトゲのある灌木は、彼らにとっては、最も美味な食物である。しかも、これらをほんのわずかしか食べない。彼らの本性は必要とするものがあまりに少ないため、食物や水なしで進む力は驚くべきものである。彼らは、決して疲れたようには見えず、通常、夕べも朝と同様、元気潰しと行進する。……

...荷を負うため胸を下に横たわる習慣というのは……運搬するものとしての彼らの運命に対する、彼らの本能のすばらしい適応である。この（姿勢）は、彼らの自然な休息の姿勢である。（それは）、足の関節のタコによって、そして、特に、巨体の下の台座の役をする胸のタコによって、証明される。その幅広いクッションのついた足の、（彼らが）主に通過するよう運命づけられた、乾燥した砂や石の多い土地への適応はすばらしいものである。……

露や草木の汁で、（ラクダは）通常充分である。しかし、牧草が乾燥してしまった時には、アラブ人達は…ラクダに、三日に一度水を与える。……ラクダは、常に、食べるのも飲むのも少しで、分泌も少ない。……アザミ、イバラ、サツササを、最もやわらかで緑の草で、よりも、より食欲に食べ反芻する。……

東方の運搬者、「砂漠の船」として、他のラクダの重要な特性は、その足の確かさである。旅する彼らが、非常に易々と、安全に、ひどく岩だらけの山岳の路を登り下りするのに、私はおどろかされた。

野変「悪」の、荒廃の自然への適応の描写は、神の怒りの風景の中の「悪」にひきわしい構図を与えよう。死の恐怖の砂漠は、このような「悪」によってのみ往き来できる世界であること、こうした表現において強調されることとなる。

（ラクダ）によって与えられる便宜なしに、人は、このような地帯を通過することができる。

こうした、馬とラクダの耐久力についての表現にみられる類似に対し、その差異も明言されることがになる。

（馬）は穀物を食べないし、粗悪な砂漠の草の茎は、その代りとして、遊牧民の馬を支
えることができないので、すべての雄馬には扶養のラクダがいる。反芻せず、皮膚の水分が多く失われる馬は、飢餓や溺水に対し非常に耐える力がない動物である。従って、その雄馬は、砂漠では、その水の貯えを他のラクダにしばしば負わせねばならない族長にとっては、少からぬ負担である。……遊牧民は、最初に雄馬にミルクを飲ませ、その後で家の者達に飲ませる。……砂漠の馬にミルクを与えることは大変重要なことである……

耐久力に差異があり、砂漠への適応力に差異があるという表現は、それ故に、有用性に差異があるという表現と重なりあう。

ネジドでは、すべての旅の仕事や苦役にはラクダが、ときに、ロバが使われる一方、馬は戦争やパレード以外には使われない。

……馬は、主に、掠奪遊行や戦闘で価値あるものとして評価されている。

もちろん襲撃の戦闘でラクダが使われないわけではなく、そうした場面での有用性の差異が、こうした表現では、強調されているとみられるよう。

百名のゼルール（ドロメダリー）の騎兵が連隊の基盤を包括する。それは勇しい光景で、彼らは高い鞍の上に身をかがませ、そのやせた、堂々と進む動物の首に、武具で輝く腕でしがみつくつつ、（軍）服をうたかつて進んだ。……ゆっくりとした羊の如き動物の上のゼルール騎兵は、その少数の軽騎兵と比べると、火縄銃をもった重装備の歩兵のようである。

そこで、このラクダ騎乗の者と、軽騎兵が対比されて表出される。

……最も速く走るドロメダリーも、最も劣った砂漠の馬に、たちまち駆け越される。従って、馬に乗った者はただ槍で武装しているだけであっても、……砂漠での戦闘の際、ゼルールに乗った、すぐとは発射できない火縄銃を持った者に対し、非常に有利である。

そこで、

……騎兵達は、ドロメダリーに乗り、端綱で馬達をひっぱって行き、敵に近づくまで馬を元
気な状態に保ち、（戦いとなった時）槍を手にして乗馬し、密集した敵に向って突き進む。

従って、ラクダは、砂漠においては、様々な場面で馬を助ける扶養者の役が与えられる、と旅人は認めることとなる。騎士的な、高貴な馬は主で、不恰好な、野蛮なラクダは従という構図が、旅行者の言説に明らかとなる。
こうした有用性の差異に対し、儀式的な馬とラクダが、旅行者によって注目されている。

…巨大なラクダ蘇であるアトファ（utufa）は、ロワラ族によって、激戦が予想された時にのみ使いられた。それはダチョウの羽で覆われた竹の籠で、ジェベル・シャンマール（Jebel Shammarと表記、今は、Jabal Shammar）の北ではダチョウは見つからないと信じられるので、ネジから彼らが初めてやって来た時と同じ古さであろう。騎乗用ラクダは、戦闘の最中も含む、その言葉で戦う者達を激励するのを務めとする少女が入ったアトファを運ぶ。一般に、攻防戦は、彼女のまわりに集まって（行なわれる）ので、彼女は、大胆で、強靭な脚を最も必要とする。彼女を護ることをロワラ族は迷信的な感情を持ち、その敵は彼女を捕えるべく、それに対応した望みを持つ。というのは、アトファを失えば、ロワラ族は滅亡する、という信仰があるからである。かつては、ベドウィンの家族が、こうした檀の一つを守っていたが、今では、ダチョウの羽が稀少であることと、（舞を）新品と取り換えるのが困難であるため、アトファとそれに付帯した慣習は、ロワラ族と、多分、信じることには、イブン・ハッダル族を除いて、消滅してしまった。

消滅してしまった、迷信にもとづくこの慣習は、目の前のラクダ蘇によって、想起されるばかりとなっているとも旅行者は語る。

（移動の際）…他のラクダの上に、ハルブ族の娘達は、その皮装束——ひるがえる彩色された布袋とラクダの皮の長い垂れ飾りで飾られた竹の枠——に入って座っていた。私が前に知っていた部族では、そうした華美なもののは、数人の族長の地位にある者の妻達だけの所有物である。……彼女らのうちの一人がアタファ（Atāfa）…であったのであろう——彼女は、軽い布（の中から、部族の若い男達の雄々しい心を燃え立たすぐれ情熱的な愛らしいので、軍歌をさえずるように歌い、[そして、遊牧の民の心は荒々しい感情に満ちる]。
……アタファを殺すことは不名誉なこととされていた。"

迷信と荒々しい感情に従って、華麗なラクダ蘇の女は、「若い男達の心を燃えあがらせて、戦さ
の舞踏で、多くの死へととび込むせると講じる。若い女が、砂漠の地で、死への誘惑者となっているとの言表が明らかとなろう。ちょうど、砂漠が、その荒々しい息で人々を愛撫すると表現されたように、家畜の有害な交雑が不毛の荒廃の世界を作り出すように、その暴虐の場に不毛の官能が姿を現わす、という表現の構図がみてとれよう。

メッカ巡礼では、バイバルスの時より、聖なるラクダ軍、聖なるラクダ（マフマル、マフムル）が先導するのがだが、これがアタファー（アトファ）と呼ばれた。「畏いの旗じるしに発する習慣」であるといわれる。

マフマルは…円錐形をした、丈の高い中空の木製の枠組みで、ピラミッド形の頂をし、ダチョウの羽で飾られた見事な絹の錦織りで覆われており、その中には、絨の切れはしで覆われた、祈祷と護符の小さな本が置かれている。…道中では、（マフマル）は、キャラヴァンの聖なる旗じるしとして役立つ。

この巡礼の旗じるしの駆籠の中には、イスラームのスルタンの贈物の…「アブラハムが創始者である」メッカのカーバの覆いである、新しい絨の布が置かれている。私はまた、我々のキャラヴァンで、マホメットの聖所のための柱大のロウソクを入れた、二つ一組の長い箱が運ばれているのを目撃した。

ダフ＝ゴードンが、このマフマルに先頭された、エジプトの巡礼キャラヴァンの出発の光景を描き出す。

私は…（カイロの）町の外の、（巡礼の）最初の宿泊地に休む聖なるマフマルを背負う聖なるラクダを見た。聖なるマフマルとメッカ巡礼の出発を描写する言葉がない。幾時間も私はベドウィンのテントの中に腰をおろし、夢見心地であった。それは、人と動物、色と動きの、最も美しい光景である。そして、彼らの最初のキャンプは、マメルークのスルタン達の（ねるる）荒廃した墓地のドームとミナレットの間に、輝かしい場所を作る。

これらの人々すべてが耐える用意をしている（これからの旅の）困難を考える時、それは人を深く感動させる光景である。

この、続く手に待ちかまえる困難は、ダウティによって、「肉体の苦痛と犠牲」と説かれたものであり、それが砂漠の中に死の風景を作り出している、と旅行者によって表現されたことはすでに述べた。すべては偽りの迷信の、年毎の「むなしの考え」によるとされていた。死者の都市の
中に、烽きを作ぐるキャラヴァンは、砂漠の中の死を予告するものなのであろうか。こうした儀式的なラクダについての言表の中に、アタファが死へ誘う官能を示す所、マフマールは死への行進を先導するオリエントの華麗さを示す、という構図が見ぬとれるよう。

エジプトの総督、ムハンマド・アリーに説見する際に、儀式的な馬が登場する。この残忍な虐殺者、無差別の殺戮者を、その「野獣の住む穴」に訪れる時、旅行者に参上するための馬がおくられる。

（説見が許された）場合、バシャはその自らの足から馬を、屋敷から召使を、外国人の供をすくく送るのを習慣としていた。３時半に、私は、美しい馬衣をつけ、新手の赤い布の鞍、具で飾られた馬駄、見事なトルコ騎士がつけるすべての装飾と装具をつけた立派な馬に乗って、ホテルを出発し、近衛兵に先導され、領事にエスコートされ、少からぬ程度の威態さと儀式でって、城勢の門に到着した。

ここでも、オリエントの壮麗な行列は暴虐の世界へ案内する、という構図がみられよう。スティーヴンス、この説見の先、殺戮者のもとを去ったと安堵を感じていたのだから、儀式の美しく、見事な馬とラクダは、暴虐や死の世界へと先導するオリエントの華麗さであるという言説が、こうした旅行者の表現の中にみとめられよう。

このような、儀式の馬とラクダの類似性の表出に対し、馬は実践的なスポーツの場面で、そして、ラクダはその重要な役割であるキャラヴァンの場面で有用さを明らかにすると表出される。

中東では、槍による馬戦は、ジェリード（djeried, jereed と表記）の名で知られている。このアラビア人もトルコ人の騎士達の試合は、「男性的なスポーツ」とか、「模倣戦」と呼ばれ、その「作法や儀式は、（中世の）トーナメントを準備する生々とした絵」を彷彿とさせるものである、と表出されている。シュロの槍を持つ騎士達の槍試合が、ウルター・スコットの描き出す騎士達の勝負の姿で、中東の地にあらわれることになる。それは、「見事な馬に乗り、美しく着飾って、大変興味深い、美しい光景」である、と表出されている。

ラマダン明けの大祭で、スティーヴンスはジェリードを観物する。強烈な暑さの、焼けつくようなルクソールでのことである。まずは前座。

（奴隷や召使らの）一団の男達は、右手に木製の槍を持ち、槍の端は砕地につけるようにして、馬に乗って互いに密着して、旋回行動の中心点を形づくっていた。彼らは円を描くように馬を進め、槍は砕地につけて、目をはると互いに相手に注ぎ、槍を投げる機会をうかがっていた。追いかけ、回転し、急に向きをかえながらも決して中心点から離れる
ことなく、ときには、槍を持ちあげて交差させ、互いに打ち合わせた……101）。

この前座が、その主人達を怠惰さから目覚ませ、その口からパイプをすてさせることになる。

（ヌピア人の主人）は、重い布のマントをぬがずに、ねむそうにして左足を幅広のシャヴェル状の靴にのせ、右足を靴の後ろの馬の尻のところにのせ、体を靴の座へゆすりあげた。靴にふれてはじめて、目が覚めたようであった。彼は召使いの手から槍を取ると、馬を厳しくチェックし、槍の重い角の金具を（馬の）腹臍に当て、砂の上を全速力で突進した。そのコースの向うの端までとり、一、二瞬あった後、槍を馬にあてて、全速力で戻って来た。次に彼はマットの上で（見ていた）トルコ人達の間にすぐと身を置くとみえたが、急な動きで（馬を）後よりさせ、全速力から完全停止へと移させた。……彼の召使いが来て、外套をぬがせた。その下に彼は赤い縞のジャケットと白いズボンをつけていたが、再び彼は前と同様、砂地の上を突進し、戻って来た。今度は彼はその馬を、猛々しい激情でもらって不意に止らせた。彼のターバンはほどけ、突然彼は激しく興奮し、ターバンを裂いて砂上に投げて、遊びをやめて、激しく相手の槍と打ち合い、戦いをすぐと始めた。

活動に怠惰のように見えたトルコ人は、今や、情熱とエネルギーと、戦闘でののはならばだしい疲労に耐える力を示していた。馬も乗り手も、燃えるような太陽と焼けつく砂を晒り、おどろくほど小さな円の中を、追跡し、回転し、急に方向を変えて、群衆の間から満足そうなつぶやきが聞えてくるまで、幾度も彼らは走りまわった。今や競技は終わり、興奮したトルコ人は、再びマットの上に膝をおろし、静粛な冷淡さに戻った102）。

競技者は、怠惰から活気へ、興奮から冷静へと姿を変えつつ、旅人の前に現われた。その時、馬は「急旋回すること」でその力を表わすことになる103）．このことは、すでに、バロングレイヴ、アラブの幾として実際に体験していたものである。「充分に訓練された馬は、その乗り手と同様、このスポーツを楽しんでいるようである」と104）と表現される。中東の騎士と馬の誇りが、こうして表現されることになる。馬の高貴さにふさわしいスポーツということであろう。旅行者の騎士道精神を、いささかでも満足させていると思われる。

馬については、乗り手の自由な操作、馬もそれに応じて急旋回が可能であると表現されるが、ラクダについては、一定の歩態と一方向の進みをし、「すべての土地について、土地感を持つ105）のように行動すると表現される。たとえば、キングレイクは、先導のラクダとラクダの行進を次のように表現している。
ラクダのキャラヴァンでの有用さは、人の手で作り出されたものでも、ラクダの役をしたこともなく、ラクダの本性であることが確認されている。その本性は黒鉄とされてきた。

…ひとたび行進をはじめたら、単に駆動にそれることができぬほど黒鉄であるために、まったく歩んでゆく。……彼らの唯一の関心は、できるだけ都合よく、機械的に前進して、多くの牧草に行き出席することである。

そうしたキャラヴァンのラクダの御使い方は、次のように表出される。

ラクダを御使い最良の方法は、朝の間は食事を控えないで、一定した歩数で進ませ、ただかたむきはじめたら、彼らが進みながら草を食むにまかせることである。もちろん、これで少しは遅れるが、我々のラクダの草を食みながらの進行は、1時間に2.5マイルの速度である。少なくとも、日の沈む3時間前には、彼らが止まるのを許すべきであり、暗くなる前に彼らが入手可能なすべてを得るべく彼らを自由にさせるべきである。月がある場合は、夜の半分は彼らは草を食みつづけ、そうでなければ、薄明けの残る数分の間に、ラクダをテントのまわりに集めねばならない。（そうした夜には）彼らは静かに腰をおろし、夜中反芻するであろう。
馬はその特性によって、人が芸術的に、スポーツ的に関与できるものであり、ラクダはその特性によって、人が従い許容するものであるという構図が、これらの表現にみられよう。高貴な、美しい馬は人の芸術的な統御を受け入れそれに協力し、野蛮な、不恰好なラクダは人に従従さという言葉を与える。愚鈍さにおいて従順なラクダは、アラブ人の統御をうけ、不承承従従い、旅人もそれに従うことで、旅が成り立つからである。

IV キャラヴァン

荒廃の地、暴虐の世界の中、馬とラクダに関わりながら旅行者は行進する。その時に、旅行者は、自分達自身でパーティを形成するか、旅をしようとしているキャラヴァンに参加するかしかない。当然、この二つの方法は差異を有し、旅人の記述はこの差異に関わることになる。

独自のパーティ形成は、ラクダを所有するアラブ人と交渉し、契約を行うことからはじまる。ガザからカイロまで、キングレイクは、10日後の旅を決める。4頭のラクダを借りることとし、「その地の安全通行権とラクダの借貸」をアラブ人ととり決める。途中、ラクダの所有者は、御者として徒歩で旅行者に従う。こうした旅では、テント、食糧、水を入った皮袋、お茶と砂糖、それにワインとバターが用意され、砂漠のため石炭が支度に加えられている。

この旅でキングレイクは、朝出発した後、夕刻までラクダを停止させなかったと述べている。シナイの調停旅行をするパーティは、昼間、「昼の熱とぎらぎらする光が、そうしたものがあれば、ある親しみのある陰の下でしばしばの休息を強いられるようになる」ところを、昼食をとり、その後日没までラクダを進めている。1日の行程は旅行者の意義を決められ、御者達がそれに従っていることがわかる。聖職者のロビンソンは、全行程で安息日は休むこととし、一度を除いてこのルールは守られたと言える。安息日を休むことに対し、アラブ人と協定を結ばず、「時と状況にゆだねることに成功したと言う。

貧しい仲間達は、時に価値を置いていない…。
…砂漠での安息日は特別の魅力を有し、忘れられぬ印象を心に残した。

単なる休息とみるアラブ人——つまり、安息日を別にする故不信仰にならないか、とロビンソンは心配しているわけだが——と、神の世界を歩み、神の御業の祝福に与ることに感動する旅人という対比の構図が浮かびあがる。独自なパーティでは、行進のすべてが旅行者の意のままになるということか。
ウィルフリドは、再び、「自分のヒント」にあり、加えて、自分のラクダと召使を得ていて、彼をなやまして護衛や警察がいないので全く幸である。人生すべてをヨーロッパで過ごした者は、「警察から自由」であると感じるせいか知らん。

味わうことのできる自由さのせいか、独自のパーティーではその姿自体は確実にされていない。それに向く、旅行者の参加するキャラヴァンでは、その姿が詳細に描かれている。

参加を希望する旅行者は、手数をもとめ、キャラヴァンの指揮官・隊長への推薦を得ねばならない。

そうした場合、多くの儀式は必要ない。すべての者は、自分の荷を運びの動物を持ち、どのキャラヴァンを選ぼうと意のままに加わる。参加者の増加は、常に隊長にとって、その収入を増し、また、全体の防衛手段を増すことになるので、望ましいことである。

もちろん、乗用や荷運びのラクダを手に入れる必要は、キャラヴァン参加でも、独自パーティーの場合と同様である。そこで、ラクダの所有者と契約しラクダを入手するとともに、ラクダの御者を手に入れることになる。パートンがそうした交渉状況を次のように描写している。

盗賊が頻繁に出、毛虫（事件）が折々おこる道、（御者の）逃走をはばむとか、新たな法外な要求を制限するための法のない道では、誠実なラクダ御者が必要である。しばらくして、（巡礼同行者のハミド）が、少年と、（その父である）短髪でやせた、ととのった容貌の、高いヒゲとずいしばしがみつかった目をした、壮健な体の年としたバダウイをつれて戻った。…（その）旅行者のマスウド…は、もったいない額度で入って来て、その右手のひらを我々の手にあて、パイプはことでわり、コーヒーを飲み、その後、交渉の用意はできていることを示し、我々を直視した。…話し合いの後、我々は、（ハルム・アル・ラシードの、ネジド砂漠を通る名高い道）ダルブ・アル・シャルキを旅しなければならない場合は、2頭のラクダに対し20ドルを支払うこと、前払い、あるいは、手付け金として半分を渡すことに対意した。

ととのった容姿、澄んだ目が、この男の誠実さを示すものとして、旅行者の描写にあらわれる。アラブ馬の高貴さ、レバンノン山中の貴人、ベドウィンの鶴長の高潔さ、それらすべては、この誠実なラクダ御者同様、その容姿、風姿がものがたっている、という旅行者の言説は明らかである。もっとも、暴虐の支配する地では、それに対抗する力をあらわにする人物像も必要とさ
巡礼のラクダ所有者達は……頑強な、風雨にさらされた旅の男で、しばしば反抗的になる。部下の者達を支配し、支配している。彼らの間に親しみのある雰囲気は、悪信頼をもって圧倒した者であり、長い砂漠の道でわざをするベドゥインの買い切りを処理し、得たことがしばしばある。

容貌に「悪」があらわれているとの指摘は、不恰好な「悪」のラクダという表現に重なるのは確かである。キャラヴァン参加にあたって、こうした砂漠の「悪」の支配下に入ることが、これらの表現において強調されているとみられる。

馬に乗ってキャラヴァンに参加したポーターは、その出発の様子を次のように描写する。

（数百頭のラクダからなるキャラヴァンで）、我々の耳に荒々しく騒音することのないペペルの音が襲う。我々の目には奇妙な混戦の光景が現出していた。彼者から逃げ出したラクダは勝手な方向へと走ってゆき、そこにあらゆるものをひっくり返さんとしていた。他のラクダは、アラブ人の古式で地面をおさえて、口を大きくあけて、その荷が移されたり、しっかりとしたりすると、ひどいうなり声をあげていた。男達も大声で、太く低い喉音で叫び、その動物を逃げられないようにしたり、仲間を手伝ったりするために、あちこち走り回っていた。その一方で、ある者達は、粗野なチェスチャーで、荷造りや商品をしっかりくくる適切な方法について議論をしていた。ばらばらなすべての者達は整列し、それに遅れた少数の者達は、仲間に追いつくように急いで動物達を駆っているのが見ええた。事実、ここで真の行進が始まり、この後秩序は保たれればならない——すべての安全はそのことにかかっていると我々は知られた。今我々は、側の他は決して知らない、力の他正義を知らないベドゥインの領土に入った……何が起ころうとも、我々は我々のキャラヴァンの力に充分な信頼を置いていた。

30分ほどで荷と秩序が整えられ、ついに出発の言葉が発せられ、全体は道3列になれた長い縱隊で進んだ。

出発時の混乱はしばしば旅行者によって指摘されている。それは主に荷積みの際の言い合いとラクダの反抗と嘆嘯が生み出すものと語られる。そしてその後キャラヴァン全体は秩序を形成し動き出すと語られる。

カイロでの巡礼の出発では一味違った感動がパートンをつづんでいたようである。
我々が陣営から大きな出入口から姿を現すと…門番を除くすべての見物人達が…「アッラーがおん身に祝福を。巡礼よ。そして、おん身をその国と友に返すように」と叫んだ。そして、（カイロの）バブ・アル・ナスル門を通り、私は歩哨と護衛兵を指揮する士官に平安の挨拶をとおくり、彼らは私に大変懇切に道中の安全を祈る言葉を与えた——アジアでは巡礼の祝福は、ヨーロッパの年とった女性のように特別な効力を持つと考えられている。門の外に、私の友人達は私に最後の別れを行い、彼らの律儀な顔と姿が遠くへと消えて行くにつれ、心がひきしめるのを感じるのを否定しようとは思わない。

整然と動き出したキャラヴァンで、旅人は、見送りの人々にとりまかれて、独白のバーティでは味わえない、別れの感動に身をまかすことか。ここでは旅行者はキャラヴァンの中にあって、深々とオリエンタルの旅の様式に順応する姿をとる、と明らかにされている。

キャラヴァンの進行にあうつ、参加者はその厳格な規律に従わねばならぬことが指摘される。その規律下の行進の厳しさを、パルグレイヴは次のように描き出す。

日々、24時間の内15、6時間、ヘロドトスのエチオピア人達が怒うのも無理からぬ、ほとんど頭上の太陽の下、我々はラクダを限界の歩態で進め…。そして、せいぜい2、3時間の、休息や眠りには不十分な停止（となる）…。そして、我々のへとへとに疲れた動物に再び乗り、暗い夜の中を、さまよう掠奪者達の攻撃と掠奪の絶えざる可能性の中を、（ラクダ達）を強いて進めた。…日々は譲受状態の夢のように過ぎ、我々はしばしば、ほとんど旅している土地を意識せぬようにする…。

…夜明けの前になり、我々は道を進み、太陽が地平線と天頂の中間にさしかかり、我々の朝食のため動物から降りる時を示すまで、我々は進んだ。我々のベドウィン達はこの（停止地）を、とある畑地が低くなった場所にとり、（身を）うまくかくせるように注意する。…そこで、我々は（ラクダを）降り、私の仲間と私は、荷物を壁のように積みあげ、焼きつく太陽光線から（我々を護る）半スクリーンとなるようにして、しばらく横になった。その後、食事の支度となる。それは、我々の用意した食糧、つまり、塩入りの粗い小麦粉の袋といくつかの乾燥ナツメヤシの実に従って、全く簡単なものであった。…我々は、今や、手で小麦粉を数回つかみ出し、ベドウィンの一人がそれをこねて…大きな丸い形にした…。その間、他の者が、枯れ草、コロシントウリの根、それにラクダの糞で火を起こした…。

食事が終わると、我々は時を失うことなく、曇気模から曇気模へ、我々の道を再びとって進み…日没の1時間ほど前に、我々は精いっぱいの力でラクダからよろめき降り、夕
食を午前の記述と全く同じに支度したが、多くの場合には、遠くにいる放浪者に火の煙が（我々の所在を）知らせるのではないかとの恐れから、乾燥ナツメヤシの実だけで満足し、砂の上で30分ほど休息を取った……その後再び騎乗し、月や星の光の下で旅をし、深夜少しずつ元気に回復させるのではなく、苦しくなる十分な眠りのため横になる。

進行のルールが厳しく、その旅が困難であればそれだけ疲労ははなはだしい。休息が欠かせないはずのアラブ人達も気がたっとうると表われる。

キャラヴァンの人々は、三日を過ぎると、その長くつづかぬセム人の忍耐力を全く失った。彼らは、絶望した人間の怒気を含んだ叫び声をその動物達に向かって放った。御者達は、のろろとした家畜をたたいて前に進め、ひどく呑いつつ、嘆きつつ、金切り声をあげつつ、槍の尻で駆り立てる……。進行してゆくキャラヴァンの人々は、日々と、より怒りっぽくなり、言葉少なになる。

荒廃の風景の中で、ラクダの「悪」と御者の「悪」が今にも旅行者に向かってその姿をあらわさんばかりの状況の描写とみられる。そうした中で様々な暴虐が旅人を襲ったことはすでにみた。幻の気象が旅人をとりこみ、ラクダの白骨が死の風景をあらわにし、砂漠は旅をする者に溺きを与える、という記述もすでにみてきた。水袋は一人に三日の水しか与えられず、水は貴重なるか故に、水飲みには厳しいルールが定められていることが指摘される。

（ヌピア砂漠）やアラビアの砂漠でのキャラヴァンでは、水飲みのために数時間全体が停止する時以外は、水を飲まないのが一般的な習慣である。この故郷キャラヴァンでは、水飲みの時間は、朝9時と、午後の行進での4時と6時の2回である。午前中は、すべての者はキャラヴァンの停止で水を飲み、食事後にも飲む。この同じルールが遠方も守られる。他の者が水を飲まないのに飲むというのは、女々しいとみなされる状況に身をさらすことである…。そして、ふさわしくない時に水袋の口をあけることで、常に拒否するのが賢明でないようかつしきい要求に旅人を従わせることになる。

こうして、水も食事も休息もすべて極度に制限され、旅行者は全く受け身の状態で旅をつづけているようであるが、ときには、独自な行動の許された安易な旅も表出されている。

（カイロからシナイへの旅で）私は大抵最初の3, 4時間、キャラヴァンに同行して歩き、
時々岩陰や灌木の陰に…キャラヴァンがやって来るまで休み、それから再び出発した。停止の時が来るまで騎乗——本を読み、瞑想し、…ベドウィンと話し、ノートをつけ、（停止時が近づくと）大抵私はもう一度歩いた。

とは言え、独自のパーティの場合安息日を休むことができたが、こうした自由をキャラヴァンで得ることはできない。それより、イスラームの札拝時は30分ほどの停止に従わざるを得ないことが明らかにされている。

こうした苦役に似たキャラヴァンが夜行する場合、旅行者は不運極まると表現されている。長く暗い恐怖の中で進み、「「土地を見る」という希望が失われて怒りつつ、のろのろと行くラクダの背に腰をおろさざるを得ない。不運な旅行者の姿が描き出されている。試練の中の騎士の如く、ラクダの背にあっては、ひたすら耐えぬかざるを得ない、という旅行者の言説が明らかにされているものと思われる。

2. キャラクター

旅行中に旅人がとるべき姿、キャラクターについて、レオン・ド・ラボルドが興味深い説明を行っている。

ド・ラボルドはその父と、小アジアのマイアンドロス川からコニア、タウロス山を越え、シリアの土地に入り、ダマスカス、ハウラ、死海を旅していた。

…私の父は、この地の高位の貴人の一人のように、所々を興で崇れられたりした。トルコ政府のタルタル人を先頭とし、私と私の同行者が（興の）聡か後に（従い、次に我々の、トルコ語とアラビア語の通訳（がつづき）、8人の騎馬の召使と5人の徒歩のアラブ人（が従い）、これに加え、興を導く者と交代のラバ（がつづいていた）。どこにあても、我々は自分の領地に向かっているバシャかペイに供奉しているものとみられた。我々の（行列の）すばらしい外観は（住民の）尊敬を呼び起こし、同時に、好奇心の応答として役立った。美しい緑と緋色の布で覆われ、黄金の球で飾られ、適当な部屋に区切られた我々のテントは、廃墟の直中やモスクの近くに張られた。そして、我々は、ローマ…で画家が出会うような妨害にあうことなく、ノートやスケッチをとった。こうした旅の様式の費用は、確かに非常に多額であるし、（住人の）欲心を強くひきつける。しかし、この不利（な点）は、外観で判断し勝ちな人々の間での見世物が常にひき起こす尊敬と恐怖によって、充分埋めあわせられる。この方法はゼーツェンがその旅
でとったものである。

この方法と逆のものをブルクハルトはとり、「独創性と冒険の特徴をより多く帯びる」が、「ひそかにノートをとらざるを得ず」、ときにそれを全くあきらめざるを得ず、「正確なスケッチをとる希望をすることとなり不利な点があったと指摘する。

遭遇することになる様々な部族の習慣や言葉を知るようになりたいと思う東方での旅行者は、確かに托鉄修道士の如き（き姿で）旅立たねばならない。こうして、彼は彼らを、彼ら自身の家で、その真の自然の生活の様式の中で、いわば、その平服（の姿）で、不意を
打つことが可能となる。彼は、彼らの内密の歴史に入り込み、彼らがさらされているすべての変遷を学ぶことになる。しかしながら、彼が観察するものの記録に関しては、彼はその記憶に全く頼らねばならない。しかし、彼の対象を見ようとする旅行者、たらえば、天文学的あるいは地形学的な探求とか、建築とか考古学的研究（をする者）ならば、壮麗さ
につづまれねばならない。……人々の習慣は公の儀式の場合でのみ知ることができるが
（こうした旅行者は）その（研究の）道具を反対される恐れなく使えよう。彼は、角度を
計り、高さを計算し、鉱物や植物や動物を収集し、古代の遺物のデザインをとり、刻銘を
コピーし、その土地の完全な絵を持ち去れよう。（身をやつし旅する）者は、土地の人々の
日常の生活に入り込み、（壮麗さにつづまれて旅する）者は、彼らの住む土の外観を我
物とする。二者の内後者のみが、前者の領域に時折侵入する、より良き機会を有する。

従って、より手間の旅の様式の方が、より確実な利点を伴うことは疑いないが⑵。

ブルクハルトがその後の旅行者にいかにみられてきたかはすでに述べた。そのキャラクターと対
比させて、ラボルドは自分のキャラクターを明らかにしている。黄金のシャワーをまき散らしながら、壮麗な行列こそが、天文学会、地質学会、建築学会、考古学的調査にもいるという表現は注
目されよう。

これに対し、ゼーツェン流の旅をブルクハルトは批判していた。

ゼーツェン氏…この博学多識の、根気強き旅行者は、ベドウィンの不審や偏見によってお
どされないことを（旅の）ルールとした。ヨルダン川を越え、死海の海岸で、ティイの砂
漠で、この（シナイ）半島で、それにアラビアでも、彼は公然と彼の務めを追いつづけ
決して乾や鉱筆を土地の人々から隠そうとせず、聖地でキリスト教徒の医者というキャラ
クターや、ヒジャーズでムスレムの医者というキャラクターで、貴重な草木や奇妙な石を
集めることを目的とする。と公言していた。もしシリアやアラビアの博物学的知識がゼーツェン氏の調査の主要目的であったのなら、彼は、彼が採用した方針において、完全に正しかったが、もし彼がこれらの土地（での調査）を、他の土地の探検にむけての中間的な段階と考えていたなら、彼はその完璧の成功を極度の危険にさらした。彼は、理性のない生き物の歴史を明らかにするのに成功したかもしれないが、住民の信頼を得ることによってのみ、そして、我々の考え方や習慣を彼ら独自のものに順応させることによつてのみなし得る。人間の特性に関する多くの情報を得る機会をほとんど得られなかった。

ウルリヒ・ゼーツェンは、1811年メッカ訪問に成功しながら、イエメンで殺されており、ヨーハン・ブルクハルトの成功と対比されているのだが、その旅の様式も。後の旅行者の旅のモデルとなるほど、対比的に把握されていることが明らかである。前者は、ヨーロッパの力の下に、金と壮麗さによって統御的な旅のモデルを与え、後者は、変装し住人の信頼に依存して、順応の旅のモデルを与えていた。こうした旅人のキャラクターの作り方、その意図、そして、そのキャラクターに対応する住人達のキャラクターは、どのように表現されたのであろうか。

i 変装

旅行者への現地の人々の暴行がその服を標的としている。という認識を旅人自身が持っていることとはすでに述べた。比較的に高価な品物は、しつこい要求と盗みの対象となることも旅行者達によくており返し申告されていた。そうした暴行にまぎれ隠さないように、旅人は現地の人々の服装をまとうことになる。手引きで旅をしていたラボルドも、旅の進行に従って、次のように語らざるを得なくなる。

エジプトからシリアへ、ペトラからジェラシュを通って行く道や、ジッダに行くことや、内陸の旅では、（服装に対する）用心が必要となる。この点での（私の旅の）手配は、通常メッカ巡礼が少しくとっていたものと同じである。……旅行者は、この土地のファッションに従って生活すべきである。そして、もし彼ができる限り危険やしつこい要求をさけようとするなら、あらゆる種類の贅沢をしてすまされなければならない。我々は全員ベドウィン達のような服を着ていた。褐色の縞のある羊の外套、赤い汁で被った羊皮の服、皮か羊毛の帯で腰の所をしたルネのシャツ、そして、黒く染められたラクダの毛のひもで頭につけられたケフィエ、つまり黄と赤の縞のハンカチーフ、（これらが）我々の衣裳の全体を形づくっていた。
「せんざく好きな知りたがりやの邪魔を阻止」し、旅人を「野生動物であるかのようにながめ
べく、集まり勝ちた土着の人々の好奇心をさける」ため、「侮辱から護る方法であり、旅で
大いなる便宜を与えるもの」となるの中東の人々の衣服を身にまとい、旅人は中東の風景の中
にまぎれこむ。ときにトルコ人の服で、ときに貧しい商人の服で、旅人はそのキャラクターをま
とって演じている自分の姿を描いている。

…私はカイロ商人の服であるトルコ人の服をつけ、ピストルとサーベルを身につけた。…
…私の服の主たるアイテムを形づくる大きな白いズボンと赤いシルクのガウンの下に、完
全なスーツを得た。エジプトに居る時から赤いトルコ髪をかぶっていた…。私の黄色いス
リッパとその上にはいた赤い靴、飾り、ピストル、剣、それに長いヒゲをつけると、私は
友人達から、よくなった外観に対する祝意とお世辞を受けた。実際、私はトルコ人を上手
に演じた。

服の他に、ヒゲと名前をつけて、旅行者はイスラーム教徒の姿に順応する。「一種の権威を示す
ヒゲ…をそろえことは恥辱とみる」とイスラーム教徒の「姿に従うべく」ヒゲを生やしつけた、
と旅人は語っている。旅人の本性を疑った者が旅人のヒゲをつかんだ時には、「自分がよそおっ
たキャラクターを確かなものとする」ために、その男をなくし、「私が侮辱を受けて、どれほど
深く憤っているかを、そばに居たトルコ人達に認めさせようとした」と、キャラクターにふさ
わしい演技をも明らかにしている。

パルマーは、自分の名がガイド達にとって理解しにくい「障害物」であったため、彼らが理解
し得る「正統なモスレムの名」に、自らのアイデンティティをあわせたと語っている。アラブ
社会で通用するアイデンティティは、イスラームの名をつけることで獲得される、と明らかにさ
れている。アラブの都市の街中に、ブルクハルトはイブラヒムとして、バグレイヴはサレーマ・
アブ・マフムードとして、バートンはアブドゥラとしてまぎれ込む。服と名前とヒゲが、真の
旅人の姿を隠し、偽りの外観を作りあげ、こうして、偽の、荒廃の、暴虐の世界に対処される、
という構図が明らかとなる。目には目を、歯には歯を、隠蔽には隠蔽をということから。変装とい
う技法の内に、旅人は暴虐の世界に順応し、その「悪」を克服せんとするとみられよう。ラク
ダの背にあって、その刑罰の如き粛態に順応して旅を行う如く、変装によって旅の試練がのりこ
えられる、との言説が指摘されよう。

さらに、禁じられた土地にまぎれ込むためには、そこに住む人々の習慣に充分順応すべきこと
が言及されている。
禁じられたイスラームの聖なる都市でも、ほぼ同様の生活をおこした。と表現されている。

もちろん、アラビア語の知識は、種々の著作、詩文の精読におよび、コーランの重要な段落は暗誦され、イスラームの「宗教的戒律の完全な課程をほど終える」までに至ったとブルクハルトは説明し、「人が真のモスレムであることを証明する」ことが、禁じられた聖なる都市の入口で求められたことを明らかにしている。「実のモスレム」の姿をとるという表現は、次の一節が言及しても認められる。

…モスレムの聖地を通るために、あなたは生まれながらの信者か、信者となった者でなければならない。前者の場合、あなたは気のめくれるように振舞う……。…背教者は打算され、忌避され、試問され、多くの者の疑惑の対象であり、すべての者の軽蔑の対象であった。それに（背教者というキャラクターをとることは）私の放浪の目的の妨げとなろう。改革者は常に油断なく見張られ、「新たなモスレム」とくにヨーロッパ人には、人々は情報を喜んで与えることはない。彼らは、その改革をいつわたったものか、強制されたものと疑い、その道をスパイをし、できる限り彼らの生活を見えないようにする。……従って、私は、生まれながらの信者として姿を現わすよりしかなかった……

旅行者の言説の内に、偽りの真のモスレムの姿が、こうして完成する。他者の本性にふれるために、「偽りの真」が変装を完全なものにすると整理されよう。旅行者の態度こそが、他者の真の姿を識別するための、不可欠な技法であることが言及されている。旅人の表現の中でその態度は、受身の順応の範囲を越し、識別可能な状況を作り出す技法となり、制圧的でない、中間的な統御の方法となっているとみられるよう。

もちろん、こうした変装のうちに調査手段が隠されている。コンパス等の計器類が住民達の疑惑の対象とされていたとの指摘はすでにふれた。変装の際には、ノートやスケッチとともに、すべてのものは住人の目から隠されねばならない。

巡礼、特にトルコからの巡礼は、彼らの聖なる使命を表すため「ハマイル」を持参する。これはポケット・コーランで、美しく金の刺繍がされた、深紅のビロードあるいは赤いモ
ロッコ革のケースに入れられ、赤い絹のひもで左の脇にさげられる。それは右腕にさげられねばならず、決して腰のベルトより下にさげてはならない。私はこれを、最も有用な品物に取り替えた。見た目は「ハマイル」だが、それには中に三つの仕切りがあった。一つは私の時計とコンパスが、二つ目は直ちに使われる現金が、三つ目はペンナイフ、鉛筆、それに、手のくほみに隠し持つことのできる細長い紙片が入れられた。143)

用具が隠され、その使用も注意深く隠される。馬の上では外套の下に隠してコンパスが使われ、ラクダの場合はおいて「自然の要求」に従うふりをして使われる144)。とされ、ノートをとるのは、ラクダに乗ったまま外套をかぶって行われ、横になってマントをかぶって行われ、やはり、「自然の要求」に従うふりをして行われると言及されている。こうした注意は、書いているところを見ると、まるで彼女が疑惑をいだければ、少なくとも私とのコミュニケーションはずっととせばめられ、「完全に彼らの信頼を失う」145)ことになるからである、と言明されている。注意に注意を重ねたブルクハルトは、ノートを取りを見とめられて、信頼を失うことになったと明らかにしている146)。ダウティの知く、それは危険をともなうことも明らかである。こうして、変装の下に隠されたものが名望な記録とそのための技法であることが明らかにされる。メッカやメディナで、バートンは、そうした隠蔽の時間と空間を見つけ出して、次のように描き出している。

ディナーの後は、いつも私はある口実をもうけて——例えば「正午のジェステ」とか「ヘランコリスト（である）」（と言って）——各間の後ろの暗い通路に敷物をした。そして、そこで横になって本を読んだり、とうとうしたり、タバコをすったり、ものを書きをしたりして、一日の最後の時間、正午から日没まで（過ごした）147)。

遅い朝食の後直ちに、上の階の小さな（自分の）部屋にひっ込み、水をまいて、マットの上に横になるのを習慣としていた。この貴重なプライヴァシィの機会に、ノートをつけられたが、一つの目は戸にはりついていた148)。

変装は、その表で現地の人々の信頼を得て、その素顔にふれる技法であるとともに、その裏で調査し、識別を記録することを隠す技法であることが、変装の言説の中に明らかにされる。そうだ変装の典型が、医療行為者という姿であった。医者というキャラクターが住人の気持ちをひらかせるものであることを旅行者は次のように言明する。

…偉大な医師（である私の家には）……あらゆる状態の、あらゆる年齢の人々が（集って
到来）、そのほとんどが直で好意をよせる態度であって、我々は、すでに、この町とそれ
が包含するすべてのものと非常に速やかに近づきになる、と予期することができた。

すべてのものごとは、うちとして、平穏にすんだ。医者の職業に祝福あれ。他には何も
のも、どこであれ信頼と親交を確かなものとする、こうしたすばらしい機会を与えてくれ
ることはない。

ときには、キリスト者であることを明らかにして旅をする者も、同様のことを言明する。

私の医療行為はわずかなものであったが、この（医者）という名は、私に、彼らの間に入
り込むことを可能にさせ、最も確かな友人達を得させた。

この医者の姿を確かなものとしてくれる道具立ての必要性が、従って、強調されることになる。

…医学の本を入れた小さな薬の箱は、こうした土地での旅行者のトランクの中で、真に価
値ある物品であろうし、異邦人が土地の人々に気に入られる確かな方法であろう。

そして、道具の他に、衣裳にも気がつくられる。

色彩豊かな上衣、シリアの上衣、賃金飾の絹の箱が数えハンカチーフ、それに、良い素
材で趣味の良い色彩の帯、そうした衣裳は、我々のよそおったキャラクターを支えるため
に絶対に必要であった。私たちは、この土地の旅をする医者、お好きならいかさま医者
のそれであった。従って、かなり上等の服は、私の医療行為の信用のために、欠くべから
ざるものであった。

生国で医者であった旅行者がこの地で医療行為をするのは当然として、リチャード・マッドンを
除けば、ここで取りあげた旅行者のほとんどが職業としての医療に関わってはいない。こうした
変装としての医者の姿をまとうに際し、西洋文明の医学的知識と、中東での医療行為との関連づ
けを、次の旅行者の言明にうかがうことができる。

一方では、旅行者の持つ知識で充分であるという認識がある。

若い頃から、私は歴史半分で医学や神秘学を学んできた。それ以上に、医術の行為は、普
い土地の住人達。未開の人々の間では比較的容易である。そこでは、より洗練された国々の人々をなやませる、複雑な病気はないからである。……従って、私は、この仕事に充分な資質が与えられていると考えた…

単純な人間には、単純な病気しかなく、複雑で洗練された知が、それを容易に処置し得るという言説の枠組みがとれる。

その一方で、この地の人々が薬に対し迷信を有しており、それを容易に受け入れるという認識がある。

アラブ人は、治療の技法を全く知らないので、すべての異邦人は医者であると信じている。そして、彼らの薬の効能に対する信頼は非常に大きく、また、それを与える者の能力に対する彼らの無関心也非常に大きいので、旅行者の進む道で、病人やその友人達の（薬をくれるようという）嘆願に常に（旅行者は）つきまとうった。

つまり、中東で受け入れられるのは、医者であって医術ではないから、医療行為の熟練よりも、医学的、薬学的知識で充分対応できるという考え方が明らかとなる。実際の場面では、次のように説明されている。

我々は医療上の忠告を求めてきた彼達に、医者ではないと確言したのだが、彼等は信じなかった。我々は運よく、カトリックの修道士達がすべての病気に対する解毒剤であると言っている、「メカのパルサム」をいくつか…持っていることを思い出した。そこで我々は彼らに、そのいくつかを与えたが、大いに感謝の念を引き起こさせたようであった。しかし、彼らはすぐに笑って来て、我々の毛を何本か乞うた。キリスト教徒の毛が、薬をあたためて焼かれ、その煙が疫病の治療を確かなものにするというのであった。我々は彼らの迷信を笑わざるを得なかった…。我々が彼等の医薬を（与えるのを）嫌っているのを見て、彼らは遂に退却し、我々に蜂蜜とパンを持ってきてくれた。

中東での病気は単純であるとは言っても、すでにみたように、種々の病気の存在に旅行者が無知であるわけでも、また、すべての病気に対応できるというわけではない。ときに、率直に治療の技法を知らぬとして、訪れた患者を追い返さざるを得ず、「ごまかしであったかもしれないが、ある簡単な調剤を与えてやらなかったことで自らを咎める」『ばかりの心のうちが語られている』。この種の自責の念にかかれることなく、また薬剤投与のせいで病状悪化の責任を問われる危険を
さけつつ、患者達の迷信に対処しつつ、医療行為はなされなければならない、という認識に至ることになる。例えば、薬の量が注意される。

…暑い土地では、寒冷な風土で必要な量の2倍の強壮剤と、半量の下剤が必要であることを心にとめておかねばならない。しかしながら、（フランスの博物学者の、シャルル・ニコラールのソニーニーが、エジプトの農民達について、彼らの胃はうまく焼けていないパンや辛い生野菜、それに他の緑の健康に良くない植物を消化するのに加えており、馬のみ適した服用量が必要とする、と述べているのは正しい。）

もちろん、上層の階級の人々に対しては、それなりの注意を払った診察、処方、作法が必要となることが明らかにされている。

（カイロで診療をはじめ）大衆があなたを有名にしたあとで、上層の階級の患者が、ゆっくりと舞台に姿を現すことになる。……（挨拶、バイブにコーヒーの後、問診をし）、あなたは彼の舌を見、脈をとり、学のある顔をして…厳粛に病気を発見する…。常に病気は、みごとに、四つの気質内の一つ、四大の一つ、「ヒポクラテスの体液」の一つに結びつけられねばならない。……「あなたが自らの手で医薬——アロエの溶液かシナモン水にしたし、アギで香づけした、大さじの大きなパンの丸薬で、それは消化不良の裕福な人が食事制限をするならば、しばしば充分である——を与える場合、あなたは、「情け深く慈悲深いアッラーの御名によって」と言うことに注意する。そして、患者が薬を服用した後、「治療者、癒し手のアッラーはほめべき」と述べ、その後あなたはベンとインクと紙を求め、処方を記す…。……

処方を書いた時、あなたは、誰もその内容に加え加えたり削除したりしないように、始めて完璧に指輪印を押しておく。敵をもつのが確かに高い身分の患者に薬を送る場合、あなたは開けられる箱やボトルに対しても、同様の用心をする。……すべての良い結果は、医者の責任とされ、家族の復讐（の危険）にさらされることになるため、こうした用心をするのは通常の分別である。

シナイ山近くでトワラ族の長老の訪問をうけたパマーは、その診療の場面を次のように描き出している。

…テント内に散らばった本や紙きれ、それに私の長いキセルが、充分に議者の外見を私に
5 章 技法——道徳論

与えていた。そこで、私は厳かな態度を身にまとった。彼の疾病についてたずねた。彼は長年にわたる慢性の嘔気 cúかかっていることが分かった。⋯⋯私は、クロロダインのボトルをとり出し、その場で薬を庫合し、それを飲む前にコーランの開扉の章をとなえるよう彼に言った。というのは、信仰と懇切さが彼に救いを与えることに役立つであろうことは確かだと私は感じたからである。イシュマエルの年老いた息子が、自分の前にカップを置き、両手のひらを上にあげ、熱烈な調子で祈りを復唱し、混合薬を飲む時、見物人は皆厳粛な「アーメン」を口にし、その後しばらく、回復した若さの全精力でって突然彼が跳び上るのを期待するかの如く、大きな関心をもって注視していたが、（その時の老人の）素朴な信頼を見て私はすっかり感動した。¹⁶⁰

医者としての恵愛は、他者の気持ちと交わりあい、他者の信頼に感動する姿をとることになる。他者の信頼をひき出すことで、変装の言説が完成するとみられるよう。一方では、野蛮な住人を薬物で処置し、身分のある住人はもったいない姿と知識と分別で対処し、好意を受くべき遠牧の民の世界ではその信頼をひき出させたのが、医療行為者というキャラクターであったと説明されているのだから。疑問は、単に本性を隠すみでなく、対象となる世界と人間と文化の記録の人知れず手にし、そのために不可欠、他者の心をひいた姿を接することを可能にするたかであると表現されていることが明らかとなる。

ii 親文

旅行者のまとう偽の真の姿が中東の人々の心をひらかせる、と表現される一方で、心をひらかせて語をする者を受け入れる人々の姿が明らかにされている。旅行者は、ベドウィンが旅にある者を歓待する慣習に注意を払っている。

盗賊と共住する荒野で（ベドウィンの）移動する家々は・「神のゲスト」である旅人達の⋯⋯聖域である。⋯沙漠の牧者は⋯夜の港として彼を頼ってくる者すべてを歓待する父親である。⋯ゲストが入室し、彼らの間に腰をおろし、少なくともいくつかのものを食べるか飲むかするまで、彼らは、時機を得ぬ質問をすることなく名誉ある沈黙を守り、「パンと塩」によって、しばしばの——二曜と昼までの——平和が彼らの間に確立する。そうしたことが、荒野の直中で、貴重な世界であり「神の保証」である。¹⁶¹

歓待での宗教上の犠牲における、ベドゥーラのこの臨時の雅量は驚かれる。彼らは他の
振舞いでは一般に、卑踐しく、詐欺的で、利己主義な心（をもち）、ねたみ深く、人嫌いである。（彼らにとっては）、男の人生での最大の名誉は、人々によって彼の恥しき者が称讃されることである。ベドウィンは、気前よく客をもてなそうとするので、その気性は感受性が鋭いし、虚栄心をもって彼たちは世の中の尊敬を勝ち得ようとする。他に危険にとりまかれ、何もない大地と大空の間を日々放浪する彼たちの心に、遊牧民の自然宗教は強く作用する。信念深く、彼たちはすべてのもののホストであり、すべての良きものの与え手である。神のゲストをもてなす。これを行うことで、彼たちは祝福と神の保護を期待する。』

こうした「礼儀正しい待穏」は、旅人によっても町のアラブ人によっても「宗教的なもの」とみなされ、と述されるている。しかし、ものおしみしない者との評判を気にして、神への信仰を深める虚栄という言説は、待穏の儀式の不正さを明らかにするものと言えようか。その待穏の栄誉を受けるべく、アラブ人達は争うことが表出されている。

「…族長達の一人…が不在であったが、アラブ人達は、誰が我々に夕食と翌日の朝食を用意する栄誉を手にすべきか、長く激しい討論を行った。遠くから、最初に知られぬ者を見つけて、「私の客が来た」と叫んだ男が、その者がどのテントの前（乗りものから）降りようと、彼をもてなす権利を有する。」

旅行者の多くは、こうして、アラブ人によって、大きな皿盛りの食事——仔羊が屠殺され——でもてなされることとなる。しかし、その返礼に関して、旅行者の意見は相違することとなる。一つは、伝統的に返礼は歓待した者の心を傷つけ、受け入れられぬとするものである。

ベドウィンのホストに報酬を与えることは、一般に、彼らの誇りを傷つけるものである。しかし、（コーヒーや葉子や砂糖のような）ちょっとした贈物を女達や子供達に与えるのは良い。……私の方はというと、ベドウィンの歓待が公平無私な懇切さで行為されていることを確信し、大抵ごくわずかな返礼をすることも嫌がった。この点に関し、私も同意する旅行者は多分いないであろう。（旅行者達は）、報酬を期待せずにサービスや歓待を申し出すことを決してしない。トルコ人や他の町の住人達に対するのと同じ仕方で、ベドウィン達をとりあつかうであろう。しかしながら、ベドウィン達の感じ方は、町の人々のそれとは非常に違い、彼らと彼らのキャンプに祝福を与えることの他には何も返報することなく別れて行くゲストの方を、支払によってすべての義務をあがなうものと考える者より、ずっと称讃しよう。』
公平無私の高潔さが返礼で賞えられるとしても，返礼が公然とされるのでなければ，いささか別の考えが表明される。

出発時に，お好みならささやかな贈物を，唯記念として歓待した者に与える。もし，あなたが公然と報酬としてそれを与えた場合，彼は傷つくであろう。そこで，あなたは召使いに，わずかな額を与える。かくしてあなたは行く所どこでも歓迎されるであろう。166

更には，返礼を期待しないような歓待はないとの言明がある。

ベドウィンの族長は，今日では…宿泊に対して多額の支払いができるか，お返しに良い食事をそのホストに与えられる者をのめ歓待するよう，特別の注意を払っている167。

（私のガイドは）旅をしている者を自分のテントにまねき，食物と言語を与え，翌朝送り出すことはベドウィン達…の習慣であって，贈物や支払いの義務はなく，私が贈物をするかどうかは私の勝手であるが，もし私がそうしなければ，手厚いもてなしをしたホストは，その（飼育した）羊が生き返って欲しいと思うことであろうと言った。私の贈物を受けとる時の，尊敬すべき人物の非常に満足から，この時は少なくとも，本で読んできたことに従って行動するより，旅のガイド…の（土地の）人々に関する知識をとることの方がより良かったのは確かである168。

こうした，二重の言葉は，血盟と血の支払いの受けとりについての言葉においてすでにみてきたものに重ねられる。一方では名誉が，その一方で欲求が，貧困と暴虐の舞台に交錯することが，これらの言葉にうかがえる構図である。この場面では，そうした交錯を見ぬくことで，他者の真実の姿が旅人の表現の中に浮かびあがる，ということなのであろう。

もちろんこうした歓待の儀式に，真の親交は語られていない。旅人はこの儀式に順応しつつ，旅の保護者に対して，「彼らがもなおきすることなく立派に，見知らぬ人々すべてに与える歓待（にみあう），我々ができる最上のも」をもって，もてなすことになる169。儀式的親交には儀式的親交をもって対応される，との言葉がみてとれる。これに対し，真の親交は，旅行者の詳細な他者のキャラクターの読みとりによって示される。

ブラント夫妻は，メソポタミアのシャンマール族のキャンプで親友を見つけ出す。

最も魅力的な容貌をした若者であるファリスは，自ら奥のテントから姿を現し，ほほえみ
をもって我々を出迎え、そのほほえみは大いなる誠実さと好意を示していて、我々はすぐ
さま、安全に彼の手の内にあると感じた。⋯⋯彼は（その歓迎の）言葉に誠実さの色調を
大いに込めていて、実際に我々は彼を感動させた。彼の振舞いは、砂漠でこれまでに出
会った誰も全く異なり、率直で懐切であり、それを示す彼は、多くのベドウィン達が見
知らぬ者と共に居る際より勝ちながら、不自然さと偽りの威厳をとることなく自らの地位に確
として居られるようなである。⋯⋯我々がこれまで探してきた砂漠の紳士にどうふう出会え
た、と私は思った（710）。

ファリス自身、その親切な行いで、我々の最初の印象が正しいものであることを示した。
彼は率直で、人が良く、愛想が良い。彼とウィルフリートは親友となった。（出会いの）
その最初から、（シャンマール族の族長）フェルヒャンやトルコ政府との関係を説明し、我々
の誠実さや善意を確信しているように我々と接することで、彼は我々に秘密を打ち明けて
いた（711）。

魅力的容貌が表わずほほえみが、この人物の誠実さのすべてを物語るものと表出され、彼らの間
でかわされた話を真なるものと保証すると宣言されている。そこで、ファリスの姿が記述される。

真のベドウィンがそうであるように、身体的にはファリスは小さいが、優雅さ、力強さ、
活発な力のモーダルである。馬の背にあたってはその部族の者で彼に匹敵できる者はいない。雌
馬を全速力で騒ぎ、頭に長槍をはりあげた⋯⋯彼の姿は、すばらしい見物である。彼は、
典型的なアラビア人の容貌である。スペイン人より濃い明るいオリーブ色の皮膚をし、
驚のような鼻をし、ほとんどのひたいを横切る黒い眉毛をし、長く黒いまつ毛で締とられた
目をしていて、非常に美しい。⋯⋯彼に従う人々は、明らかに身も心も彼に献身し、メソポ
タミアで最も美しい男で最もすばらしい騎士として、彼を讃えている（712）。

『砂漠の紳士』は、美しい容貌で馬上りじしの騎士であることが言明されている。その姿が、理
想的な形姿として描かれ、その言動とあいまって、誠実な親交を可能とする者であることが確証
された、と旅行者は語っている。形は変わってもいるものの、旅行者自らが持つ理想の人間、騎士
＝紳士というキャラクターに、こうした中東の人々の理想像が重ねられる、という構図がみてと
れよう。

多くの旅行者の友人達は、精神的な長所を表示する容姿をもつものと描写される。パルグレイ
ヴの友人の一人は、『良い風采』をして、その持ち物は『重要な人物』であることを示し、美し
い容姿とすぐれたものごしで「従わりのない身の処し方と高い名誉感覚」を表わすと描かれ、もう一人は「威厳のある人物で、そのはっきりとした面立ちは、並以上の知恵の輝きに照らされ」、外国の人々に対して「礼儀正しく、寛大な判断者」であると語られる。ダフ＝ゴードンの友人は、「高貴な血筋の者」で、「容姿やマナーの点で最も優しい彼女で……洗練されていて、非常に飾り気なく、カモシカの……優美さを有し」「我々がキリスト者の慈悲と嘘を感情のすべてを……有し、その願は「最愛の使いのようである」」と描写されている。

こうした容姿と従順の結びつきを読みとられた者が親友とされる一方、そうした友人達の自由な考えがその特性として指摘される。

ハーレルの主判事は、「誇張な交流」の代表者で、「すべての事柄について……自由な所見を行う」者と説かれ、ルクソールに現われた「アラビアの賢者」は、上品で涼しい目元の医者で、「偏見がなく、顕微鏡な」と語られ、パクダッドの、インドからの亡命の王は、「威厳ある貴人」で、「東方の人々の考え方とともにヨーロッパ人の方が考えをも理解し」傷がなく、すべての者に対し「真実を発見すると正しいと考えることを言う真の自由」をもたらす人物であると描かれている。

不恰好で野気なラクダと対比される。高貴で美しい馬は乗り手と意志をかわわせるように、暴虐の悪魔的な敵対者と対比される。上品で優しく美しい親友は旅人と自由な意見を交換する、という類似の表現が明らかとなる。それでは、馬が旅人に関与してくれる快適さに比べられる、親友達が旅行者に与えてくるものではないかに描かれているのだろうか。

ハーレルの主判事は「宮廷の陰謀と都市のゴシップに関する『日々のニュース』」を与えてくれ、ダフ＝ゴードンの友人は彼女にアラビア語とコーランの読解を教えてくれ、インドからの亡命者王は砂漠のベドウィンへの推薦状をしたためてくれ、ジャンマールのアルマリスは旅人と「兄弟の親しい」を行いその友情を確かなものとしたことが表れている。

暴虐の影でふれたリアドでの難事にバルグレイヴを支えていたのは、アレッポ生まれの、ベルシア人巡礼のキャラヴァン・リーダーをしていた、アブー・イーサであった。旅人のリアド滞在を可能にした調査——香木を賭けて贈る——は彼のものであった。また旅人のリアド脱出を助けたのも彼であった。ボレイダ（Boreydaと表記、今はBuraiyda）で出会ったアブー・イーサは次のように描かれている。

（彼の）アラビア半島の（住人）には明らかに属さぬタイプの、目立って美しい顔、肩までのカールした長い髪、旅でいくらかよこたれた繊細な紬の外衣、頭に被ったシリア製の彩色されたハンカチーフ、ラクダ御者という彼の階級と職業で普通であるものより、ずっとすぐれた装束を示すマナーと容姿は、それ自体注意をひいた……。
彼の高雅さ、ゆったりとした態度、それに全き誠実さは、ワッハーポ派のガイド達のはげしい強欲さと粗野な態度になれた巡礼達の間で好意的にもかえられた。……
彼は、紳士の、ゆったりとしてもの静かな態度で入って来て、すぐと、わずかな困惑もなく、（我々の）会話に加わった。……彼の態度は、町の住人のものでもベドウィンのものでもなく、イスラーム教徒のものでもキリスト教徒のものでもなかった。それはすべてに関わり、しかしそれにも属さなかった。男らしい顔（であった）が、18世紀のネルソン（提督）やロドニ（海軍大将）やその他の著明な人々のポートレイトに認められるような、半ば女性的な繊細な表情で特散げられていた。

彼自身、ワッハーポ派の「堅苦しい排他性を嫌い」、自由にタバコを喫い続ける身について、「控え目な品行方正さ」で知られ、「放蕩の疑い」がかけられることなく、「一夫一婦を守る」と言及されている。こうして親しく旅を続け、旅人は彼と「真に親密」になったとされ、彼は渉外係として活躍したと語られている。家庭にあっても、友としても、職業でも、すべてに誠実であるとのプロテスタンティズムの徳と、この旅人の親友の姿が重なりあうことは明らかであろう。中東の暴虐の風景の中に、男らしくも繊細な、美麗で誠実な自由主義者が、旅行者の筆によって姿を現わす。もちろんそれが、狂信的でなくにくい、暴虐の敵の姿と対比されているのは明らかである。この対比は、ダウティの親友の描写において確証されるよう。

アラビア半島のケイパールで、ダウティは、そこに出張によって、不当な拘禁生活を余儀なくされたことはすでに暴虐の章で述べた。この生活を助けた友人が、メディナの商人モハメド・エン・ネジューミであった。この人物については次のように描写されている。

彼は、私の所へ近づき…力強い男の自信ある微笑をもって上機嫌で私の前に腰をおろした。

彼は、温和で陽気な気性で、大胆で容姿で親切で、心の内に神を恐れ、容易に動揺する（人物）であった。彼の心は、愉快で、人間味あるユーモアに富んでいた。人を愛し、彼は仲間者となって利己的ではなく、友との交わりに真実で、快活であり、即座の先を見通した機知を有する。

旅行者は彼の幼い娘の病を治してやり、彼は旅人の「孤独な立場を護り」、「高潔な善意」を旅人に示しつけたと語られる。これらの言葉は、ほとんど、当時のイギリス人を驚かせる「キリスト者の男らしさ」に重なる。

このモハメドが軽蔑する「凶悪な」村人達の手本の一人アリーは、次のように描かれている。
アリーの奇妙な変動に富むマネキンの容態を見て、私は、彼が少々精神に異常をきたしていてにちがいないと思った。――彼らすべての最悪の狂信者達は、この醜い、長く苦痛の染み着いた顔色と、不愉快で珍妙な気質を示している。

モハメドの「堂々とした風采」人間味のあるユーモア、謙遜深さは、アリーの醜い容姿、狂った気質、狂信と対比されて、旅人によって認められ、描かれていることが分かる。この対比は、暴虐の支配者と貴人ととの対比として表出されていたことが思い起こされよう。

この保護者の手の内にあって、旅行者は束の間の休息を味わうこととなる。

冬の太陽が、わずかな黄金色の熱を投げかけはじめると、我々は、鉄剣、鉄、籠といった道具を持ち、彼の果樹園へ行った。…卑しい村から出て、私は自由な空気をすい、多くの憂慮の直中にある、彼との幸せな交わりの中にいくらかの休息を見出した。

心をひらかせ友との安らぎの時が、果樹のもとに見出される、との表現はバルグレイヴの旅行記にもあらわれる。ラシード家の寵臣アブデル・マフシンと旅人は、ハーメルで「親密な近づきとなり、変わらぬ友」となっている。

彼の目は大きく、理性で、容貌は整っていた。……手にした飾りのない杖は、彼の平和な、尚武的でない資質をものがたしていた。要するに、彼は学理的な、あるいは、文学に通じた廷臣、あるいは、著述家が確かな紳士の外見をしていた。……彼は、この町の…古く高貴な家系に属していた。…政治的問題に公然と関わるのを避け、外見は文学と社交に専心しつつ、実は彼はこの地方の深謀遠慮な貴族であった…。

こうした知識人との親交は、次のような場面に描かれている。

果樹とヤシの木々の間に、密集した群衆で見えない泉から絶えず供給され、（人の）骨折った仕事によるのではなく、助力をたのまぬ自然の作用のように見える流水のわきにある庭園は、我々の午後の開催の舞台であった。ここで、涼しげな木陰で手足をのばし、我々は何時間かを、アブデル・マフシンや同じような楽しみをもつ他の人々とともに、アラブの詩人や作家の各々の真価を批評していた…。

こうして、親友は、安らぎの風景の中に、果樹の木陰に、心やすまるひと時を旅行者に与えてく
れていた。馬上にあって生きかえる如く、安らぎの庭園を親交が用意する、という構図がみとめられよう。暴虐の風景の中、荒廃の風景の中に、理想的なキャラクターの親友が見つけられ、その親交による束の間の安らぎの光景が描写される、という旅行者の表現がきわ立つ。理想的キャラクターを身にまとう旅行者は、理想的なキャラクターを有する親友を見つけ出し、安らぎの状況を見つけ出すに至る方法を旅行記の中で明らかにしているとみられよう。

３. 静寂の風景

旅の技法は、旅での「悪」を克服し、危険を回避し、他者の実相に接近し、旅の記録を完成するため、旅の手段を明らかにし、旅での自らのキャラクターを確かなものとするものと整理される。その際、旅行者が選ぶものと、旅行者の目の前に現れる人々は識別され、対比的に描写されたことが明らかになった。そのための、旅行者の対比の枠組みは、次のようにまとめられよう。

<table>
<thead>
<tr>
<th>馬</th>
<th>ラクダ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>温和</td>
<td>狂暴</td>
</tr>
<tr>
<td>なめらかな歩態</td>
<td>不愉快で重苦しい歩態</td>
</tr>
<tr>
<td>甦生させる力</td>
<td>死傷させる力</td>
</tr>
<tr>
<td>御し易さ</td>
<td>御し難さ</td>
</tr>
<tr>
<td>こまやかな感じ</td>
<td>強情</td>
</tr>
<tr>
<td>自由</td>
<td>悪</td>
</tr>
<tr>
<td>高貴、エレガント、優雅</td>
<td>野蛮</td>
</tr>
<tr>
<td>知的</td>
<td>愚鈍</td>
</tr>
<tr>
<td>美</td>
<td>不恵好</td>
</tr>
<tr>
<td>勇ましさ</td>
<td>総病</td>
</tr>
<tr>
<td>高潔</td>
<td>悪意</td>
</tr>
</tbody>
</table>

そして、他者の姿は次のように。

<table>
<thead>
<tr>
<th>親友</th>
<th>敵対者、暴虐者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>魅力的な美しい容貌</td>
<td>醜い、マネキンの容貌</td>
</tr>
<tr>
<td>ほほえみ、涼しい目</td>
<td>悪魔の形相と眼差し</td>
</tr>
</tbody>
</table>
こうした対比的な描写を通じて、旅を形づくる世界が把握され、左側の力によって旅は安全に、生々とした姿で行われ、右側の力に直面された、という旅の技法の枠組みが整理される。その際旅行者は、中東の風景にとけ込みぬく変装によるキャラクターを身にまとって、中東の人々の生活の中に入り込みつつ、観察者としての姿を隠して旅を行っていることを明らかにする。参加しつつも距離を置く観察者の姿は、疫病や気象や暴動の危険や荒廃に対して、巻き込まれつつも身を引き離している観察者の姿に重なる。

その旅人の目的の前に次のような風景が現れる。

1862年6月16日の夕方であった。最大の黒い月はすでに深さ青い雲のない空に見え、一方三日月は西の空高く光輝き、我々の夜の進行の数時間、我々を助けることを約束していた。我々はすぐとやせた長い頸をもった動物に乗せられて・・・顔を東へと向けた。我々の後ろには、暗い闇報のかたまりとなったマアーンの市の圏域と城、その家々と庭園が、そして更に後方には、遠くヒジャーズの海岸の山並へと連なる。シェラ（Sheraa, 今は Esh Sharâ）山地の高い不毛の山並があった。我々のまわりには広い平坦な平地が、月の光で白く光る明るい砂のまじるせや枯れれた草の色いすじを赤く、玄武岩と凝灰岩の数えきれない小石で一面黒くなって広がる・・・我々のアラブの仲間達すら破るのを恐れて、深い静けさがすべてをつつむ。・・・我々のラクダの音をさせぬ歩みは、密かに、しかし速やかに、暗がりの中を静けさを乱すことなく急いだ

911
ほとんどの同様な描写がパルマーによってなされている。

（シナイでの深夜行）は、その後何年も記憶にとどまった光景であった。銀色の月の光の下、砂漠を越えて進む線のようなキャラバンは・古代の東方世界の影のような行列に似ていた。垂れ下した着衣に身をつたんアラブ人達、リズミカルな音をたてぬ歩みで進む巨大なラクダ達、深い闇、そしてとりわけ、我々の背後の山々の塊のかすかな雲のような輪郭が幻想を増した。そして、我々は、ゆっくりと静かに、まるで一言しゃべると魔力を破り、神秘的でロマンティックな光景を消滅させてしまうことになると恐れられているかのように進んで行った。

それに、夜のキャンプにはこうした静けさに孤独感が加えられて描写される。

あなたの周囲の世界はすべてあなたのもので、お好みの場所にあなたは孤立したテントを張る。……ついに場所が定められ、我々は停止に至る。……私の召使い達はアラブ人に助けられ、テント張りとたき火の用意に忙しくしていた。これが行われている間、私は自分の足跡を戻る時を目の着るとして、よく東へ歩んでいったものである。私の従者達の楽しきような声から離れて、私は砂漠の寂寥をより良く知り、また感じることができた。しかしながら、こうした光景がもつ影響力は、心を和らげるような種類のものではなく、アジアの荒地にこうして唯一人立つことを可能にした自足のうちの子供のような歓喜で私を満たした。……我々の小さなキャンプ…は、こうした孤独の直中で、私のために出現した、正に家のようなであった。

荒野にあって、星と月と暗がりが成り立たせる静寂の光景は、美しくも幻想的で神秘的な孤立の様を明らかにする。

このような砂漠の、荒野の情景は、サッカーが、18世紀の美学の内に見つけ出している。エジプト砂漠の風景の美しさは、チャフツベリ伯アンソニイ・アシュリイ・クーパーによって、「静穏、のどかさ、隠遁、平穏、静けさ、秩序、威厳」といったものを示すロマンティックな場所であり、「心よろこばす荒涼さ」を与えるものとされ、「荒々しい光景」は恐怖をともなう「崇高美」をもつエドマンド・バーグが明らかにしている。バーグによれば、崇高なもの、最もロマンティックな特性をもつ「孤立」であるとされている。こうした崇高美の風景は、夕景や夜景や墓地の風景として呈示され続けていた。ワーズワースは、その「序曲」の中で、都市での拘束から解放され自然にふれ合い、本来の自己を獲得する場面を、静寂の風景とし
て示ししている。自然は、「完璧な孤立」の姿で、「じっと静かに不動の姿勢」で彼の前に現われ、「まるで砂漠の中の様な、大空、静寂、月影、人気のない街路、ごくまれな物音、といった光景の静かさ、美しさ」ととりなめられ。そうした風景の中で、「感性は孤立の如く甘美さを作り出し」、「神聖な静けさが私の魂全体を覆い」、外の自然は「内なる風景のように現れる」というわれている。その時、「崇高な喜び」が生まれ、その「静かな感覚」こそが、「超越的な命にふさわしい一つのもの」とあって、「超越的な平和と静けさ」が、こうしたものを持ち上げるというわれている。それこそ、「孤立の自足する力」なのかと教えられるとワーズワースは明らかにしている。

旅で表出された、孤立と静寂の風景は、自足をもってて、旅行者の姿のうちの、偽りの真の姿の内に、真に真なる姿を露わにすると、崇高と静寂の言説を形づくるコンテキストが明らかにする。旅行者が身にまとったキャラクターが誠実な友との親交を導き出す一方、静寂的な場面が旅人の真の姿を導き、という言説が旅人の手からくり出されている。

シナイの谷間の途路は、「垂直の壁のように聳え立ち、古代のある見事でされた都市のキクロブスの街路の外観」を見せて旅行者を「恐れさせ」、圧倒し、旅行者をとりまく静けさは墓地の静けさであったと描写され196、シリア砂漠の旅を終えてダマスカスに近づく時、旅行者の目にふれる風景は、

日没後の大空は絵画たる姿であった。…いくらばかの軽やかな羊毛のような雲は、いわば空をよぎる白雪サテンの淡い帯を形づくれていた。木の葉をゆらす微風もなく、夕方の静けさと静穏さを破る音もない。

と描写され、その風景の「柔和な美しさと心をやわらげる静穏さ」と「自然の崇高的美しさの」「観照」が表出されている197。

こうした観照が可能となる世界は、もちろん、旅行者の自由な場所である。そして、そこへと旅行者を導むのが、神の御手であると言明される。

砂漠の最初の一夜は私の人生を画した。……夜の冷えをおぼえることなく、体と心に新たな活力を注入する新鮮な微風がテント内に吹き込んだ。ちらちらするキャンプの火が赤い光を、一日の疲れで休んでいる黒いベドウィンの小さな群の上に投げかけていて、すばらしいピクチャレスクな、また、レンブラント（の絵）のような効果を生んでいた。……夜の静寂（の中心）…私は身のまわりの光景を、喜びと畏怖の交じった感情でながめていた。多分イスラエルの子孫達がエジプト人の追跡者の手をのがれてキャンプした、正にそ
の場に私は慣れたわっていた…。カイロの街のさわぎしい雑踏を今離れ、大いなる孤独の自由の荒野に逃れ出た。彼らに臨んだにちがいない、特別な神の保護の感覚を私も味わっていた…”この恐ろしい荒野を安全に人が進んで行けるのは神のおかげである。そして、選ばれた民の場合のように直接の啓物の介入によると、理性と深慮のすばらしい作用によろうと、人を導くのは神の御手のみである。

崇髙美の言説が、荒野の自由、静寂、孤独に交じり、神への感謝に結びついている。そして、こうした光景に天空のショーが、「砂漠の寂寥」の中で加えられることになる。

天空が、その美しさ故にこの風土では特に知られているが、そのすべての美しさで輝いていた。東の方では夜はその黒い翼をすでに広げており、孤独な一等星が、おぼろな山々の上に、淡くほんぼげにかかっていた。西の地平線上にそう黄色の光は、紫色の薄い色合いへとゆっくりと変わって行き、荒々しい人気のない平地の広がった表面にそって地味で穏やかな色彩を投じ、その寒々とした荒廃した形に身を包まざるいざこざし、その一方、次第に輝きを増してゆく月が…そのほのかな光を別れてゆく日の光とまざらせて、清浄な雲のないエーテルの中へと進んで行った。…砂漠にそって急風に動く白い砂の渦巻きと、遠方のドリメタリーのMonte Carloの形をした形を地上に広がっているのが見えた。かすかなラクダのベルの音、あるいは、羊飼いの犬のたまに吠える声だけが、この光景の静けさと平穏さを破る音であった。この風土にあって、いかに変わることなく、人の注意は地上から引き離されて天の美しさを観察することか。…我々は、よりしっかりと、「上なる天」と「精神によって天を飾らしめた」神を学び、観察するよう導かれる。

18世紀から19世紀へと変わる時期、イギリスのロマンティシスト達に影響を与えた、ネオ・プラトン的なコンテクストでは、美は範型である神なる一者の流出であり、自然はその似姿をうけ、魂の反転（天上への）たる観照は静けさの中で真の自己に回帰して行われる。旅行者の描き出す静寂の風景は、このネオ・プラトン的な観照のロマンティシストの新たなる自然との関わりに関する解釈——自然と人間、主体と客体の関わり——に関するものと見られよう。しかし、その一方で、それより古代的な、自然と人間の一体化の感覚が砂漠の静寂さの内に現れると、バートンは描き出している。

…砂漠の風景は著しく暗示的である。それらは過去ではなく未来に訴える。それらは、決して記念するものでない故に、立ち現われる。…恐ろしいまでにそのよごれなき美し
5 章 技法——道徳論

さをもつ空と、無悲悲な目をくらませるざらざらとした光の牡蠣す……流動する砂の堆積……野生の動物や野蛮な人々がはびこるやせ衰えた土地……それより刺激なものの……それより崇高なものがあるら。人は胸の内で、そのいっぱいな力を自然の力と競わせ、その苦難に勝利することが明らかになると考えて、その心ははずむ。……荒涼とした静けさ、

孤独、そして、その風変わりな荒廃の中で……あなたの肺は楽になり、あなたの視野は明るくなり、あなたの記憶はその箇子をとりもどし、あなたの生気は旺盛となる。あなたの想像力と想像力は強く、覚醒され、あなたの周囲の光景の野性と崇高さがあなたの魂の全エネルギーをふるい立たせる。あなたの士気は向上し、あなたは率直で、誠実となる。偽善的な振舞いや文明の苦役は、背後の都市に残された。あなたの感覚はよみがえる。……卑に動物的な存在の中に強烈な快楽がある。激しい食欲は最も消化し難い食物を食い尽くし、砂は羽毛のベッドよりやわらかく、空気の清浄さ、突然、病気の猛烈な一団を敗走させる。……輝かしい砂漠をドロメダリの上から見おろす時、すべての者は、その胸がひろがり、その脈拍が強く打つのに感ずる。……それと、自然が人間にもどるという、古代の真実のもう一つの例証である。

一方では天上的なものへの回帰が、その一方で荒々しい地上の自然への回帰が、静寂と孤独の風景の中で達成され、自足した本来の自己の姿が旅する者に与えられるということであろう。疫病と気象と暴虐に勝利する旅人の姿は、観てる美にくるまれ、野性の力に興奮するものと言表されていることが理解される。自由を求める旅の技法は、他者の姿を明らかとするとともに、こうした旅人自身の真の姿なるものを示すものであることが理解されるよう。

5 章（技法——道徳論）注

2) フーコー, 1977, 306—8頁。
4) This Lime - tree Bower My Prison (1797).
6) ジルアード, 1986, 61頁。
7) ジルアード, 1986, 62頁。
11）Vance, 1985, p.17.
13）Vance, 1985, p.74.
14）Vance, 1985, pp.72－3.
15）ジルアード, 1986, 143頁。
16）ヘロドトス, 「歴史」巻7, 86節 (1971－2, (下), 60頁)。Diodorus Siculus, II, p.51.
17）主に, 加茂儀一の研究による。加茂, 1973と1981参照。
18）野村, 1985, 110頁。
19）野村, 1985, 105頁。加茂, 1973, 390頁。
20）野村, 1985, 106頁。
21）加茂, 1973, 374－5, 390, 393－4頁。
22）野村, 1985, 106頁。
23）加茂, 1973, 390頁。
25）加茂, 1973, 390頁。
26）加茂, 1973, 668頁。
30）Stephens, 1837, p.230.
32）Stephens, 1837, p.294.
34）Kinglake, 1844, p.13.
35）Palgrave, 1865, pp.310－1.
36）Palgrave, 1865, p.309.
38）Kinglake, 1844, p.13.
42）Stephens, 1837, p.163.
43）Kinglake, 1844, p.188.
47) Palgrave, 1865, p.25.
50) Kinglake, 1844, p.183.
51) Stephens, 1837, p.73.
52) Kinglake, 1844, p.137.
55) Palgrave, 1865, p.305.
60) Palgrave, 1865, p.306.
62) Palgrave, 1865, p.196.
63) Palgrave, 1865, p.195.
64) Kinglake, 1844, p.183.
65) Lepsius, 1853, p.82.
70) Burton, 1878, p.72.
74) Palgrave, 1865, p.310.
77) Kinglake, 1844, p.183.
79) Wilson, 1823, p.300.
83）堀内勝によると、「dromedary に最も近いアラビア語…はザルール dhalul（複 dhulul, adhīllah）と言う。ザルールとは「従順な, または服従的な」の意味で, 人間に対しても用いられるが, 「御しやすい」の意味で, クダラー馬などの乗用動物に用いられる語である」。堀内, 1986, 275頁。
88）Doughty, 1888, vol. II, p.329. 但し, [ ] 内を除き, ( ) 内は筆者の補入。
90）Burckhardt, 1829, p.271n.
91）Burckhardt, 1829, p.271n.
93）Duff - Gordon, 1902, p.74.
94）Lindsay, 1835, vol. I, p.41.
95）Stephens, 1837, p.19.
96）アラビア語の、シルの枝で作った植 jaridに由来しているものだが、旅行者達は, fantasia, fandango, equestrian exercises という名称を与えることがある。
99）Stephens, 1837, p.74.
100）Addison, 1838, vol. II, p.81.
101）Stephens, 1837, p.74.
102）Stephens, 1837, p.75.
103）Palgrave, 1865, p.311.
106）Kinglake, 1844, pp.197-8.
107）Palgrave, 1865, p.25.
110）Kinglake, 1844, pp.142-3.
111）Palmer, 1871, pp.32-3.
120) Palgrave, 1865, pp.6-8.
128) Burckhardt, 1822, p.520.
129) Laborde, 1836, pp.43-4.
130) Burckhardt, 1819, p.xxiv.
131) Irby & Mangles, 1823, p.189.
133) Stephens, 1837, p.224.
134) Wilson, 1823, p.122.
135) Burckhardt, 1819, p.xxxi.
138) 例えば、カーライルやテニンズによって、すべての自然や現象や現われは神の変装であり、人はそこから神の真理を読みとらねばならぬものとされ、自らの肉体はそうした変装であって、その試練こそが人生であり、それを克服するモデルこそキリストの愛内の意味であったことが明らかにされてい
141) Burckhardt, 1819, pp.xliii, 71 & 73.
143) Burton, 1855-6, vol. I, p.239.
144) Burckhardt, 1822, p.445.
146) Burckhardt, 1822, p.521.
149) Palgrave, 1865, p.103.
150) Palgrave, 1865, p.362.
152) Irby & Mangles, 1823, p.196.
153) Palgrave, 1865, p.4.
155) Stephens, 1837, p.220.
156) Irby & Mangles, 1823, pp.180-1.
160) Palmer, 1871, p.129.
164) Burckhardt, 1822, p.484.
165) Burckhardt, 1822, pp.486-7.
167) Palmer, 1871, p.486.
176) Duff · Gordon, 1902, p.316.
179) Duff · Gordon, 1902, pp.114 & 228.
182) Palgrave, 1865, pp.170, 173 & 175.
189) Palgrave, 1865, pp.79 & 82.
190) Palgrave, 1865, pp.124−5.
191) Palgrave, 1865, p.2.
192) Palmer, 1871, pp.267−8.
193) Kinglake, 1844, p.144.
194) Burke, 1757, 1, xi. Thacker, 1883, pp.15−6, 77 & 79.
195) Wordsworth, 1979, II, II.76−7, 112, 296, 302, 345, 348−9 & 352−3; VI, II.130−1 & 135
    −6; VII, II.660−2.
196) Laborde, 1836, p.89.
200) ラサン, 1988, 89−93頁。ここで詳しく、このネオ・プラトンズムのコンテクストを明らかにする
    のは主旨ではない。（Cf. Twichell, 1983, pp.33−4 & n.）トマス・タイラーから19世紀をつらぬき
    ジェイムズ・フレイザーに至る、形姿・似姿に関する、このコンテクストは別に論ずることにしたい。
202) この結びつきは、ジョゼフ・アディソンの詩において、ニコルソンが指摘している。ニコルソン,
    1989, 368−379頁参照。